

バルカノン



特輯
日本浪漫派
梅村忠夫氏を囲む座談会

昭和三十三年七月二十五日印刷・昭和三十三年八月一日發行（一・四・八・十月發行）バルカノン第8編（あさあけ通巻第二十九号）
昭和三十三年七月二十五日印刷・昭和三十三年八月一日發行（一・四・八・十月發行）バルカノン第8編（あさあけ通巻第二十九号）

岩崎工業所

岩崎信雄

営業科目

給水給油装置
消火設備
衛生設備
暖房・冷房・換気装置
ポンプ設備
瓦斯設備
プロパン瓦斯販売

工事設計請負

広島市千田町3の828

電話：南④8847番

8

夏季號

中國工業株式會社

淨水 煖房
 化道 衛生
 槽生 房
 設計 施行

吳市岩方通10の9
 電話吳②三六八九・三四七七
 出張所 広島・岩国・松山

パルカパ

8
 夏季號
 1958. 8.

目次

華狩頌……………表紙板画……………棟方志功

火の矢……………2
 行脚とデモ・教育は誰のものか

特輯・日本浪漫派

1. 対談・日本浪漫派とその周辺……………6

語る人 保田与重郎 訊く人 清水文雄

2. 回顧・日本浪漫派……………14

伊藤佐喜雄・伊馬春部・田中克己
 小高根二郎・藏原伸二郎・浅野晃

3. アンケート・日本浪漫派の意義と作品 20
 田中克己外

隨想 長恨歌……………河野辰三 24

梅棹忠夫氏は東南アジアを廻つてきた(座談會) 28
 梅棹忠夫・小林健三・酒井行雄・火の会同人

創作断点……………西木 薫 36

火の会

この問題については朝日新聞の天声人語は「この平和行進は日本が本家ではない、今春四月米英がその口火をきった。米国ではベン

すに所謂政治的半端刀を巨手に任せて強奪せられることは今日惡弊の最たるものである。これは現自民党政府もさうであるし、それに

を排しては、本末顛倒である。こんな例は世上多いことだ。そしてその最大のものは勅評

火の矢

行脚とデモ

昭和三十三年六月二十日のことです。カラ梅雨のカンカン照りつける太陽の下を頑丈な体をした壯者と白髪のお教授と女性を含めた数人の人々が広島と呉間の国道を歩いておました。

これは十三回原爆記念日を前に原水爆禁止日本協議会が計画した五十四日間にわたる広島と東京千キロを歩く「平和行進」です。壯者は広島慰霊碑前を出発して東京迄唯一人一貫して歩く西本敦氏であり、お教授は原水爆禁止広島協議会理事長である広大の森滝市郎氏でした。

この文明開化の世の中に広島から東京まで歩くということに私は昔の宗教家や詩人達や芸能人の行脚を思ひ出しました。ある宗教家は土木工事を起し、醫療施業の道を講じました。ある詩人は弟子をつれて歌枕をめぐり、行くさきくの門弟達に風雅の道のきびしさとそれへの確信を与えながら旅に死んでゆき

ました。又ある芸能人達は門付の歌謡若しくは舞踊によって諸国を遊歴してゆきました。

さまざまな行脚の精神とその方法があり、その為に民生の安定や死者への供養や文雅の流行や、庶民芸術の振興がなされたのです。

しかしながら行脚する凡その人々はその様な結果として生れた一つの大きな目標を他にあらはに示しながら(スローガンとして)旅をしませんでした。彼等は自分の一生をかけた「あるもの」を簡単に口にしなかつたのです。それは理想に対する清潔で深い愛情の故だと思ひます。ある者は黙々として実践し、ある者は風雅を以て一番大切に自分が思つてゐることをそれとなく示しました。総じて彼等に一贯したものは濃厚な求道者の性格でした。そして言ふまでもなく彼等が歩いたのは、当時、汽車もバスも電車もなかつたからです。交通網が縦横にはりめぐらされた現代の日本で、乗物に乗りず歩くことすれば、そこに現世での深い嘆きと未来に対する大きな祈願がなければなりません。即ち昔行脚した理想の人を己の胸深くいだくことによつて初めて行為の初発を生じることです。別の言葉で言へば先人に対する志の継承があつたのです。私は戦後二百十七日間八千余里を歩

き通した人を知つてみますが、囊中にはいつも「古事記」と「芭蕉文集」が入つておました。

さて今度の「平和行進」は日本の伝統的行脚ではない様です。これは「デモ」と呼ぶ方が良いかも知れません。読売新聞の報ずるところでは「原水爆実験禁止運動としてアメリカ、イギリスなどで行われてゐる、歩く平和行進」になつて計画された大衆運動で行くさきまで「一時間でも一歩でも」と呼びかけ同調者を加えながら東京まで歩く」とあります。つまり行脚者個人の発想によつて行為が決定したものでなく、団体運動の環として行事が遂行されてゐると言へます。又広島市では出発の日に、核武装の阻止と民主主義擁護のためにと書いたプラカードを持つて約百人、二十日あき広島市平和公園内の原爆慰霊碑前をスタートしたと産経新聞は伝えています。これはあきらかに示威であり、愛と真理への認識と帰依を説くアジアの行脚僧には考へられなかつた発想でありませう。しかし西本さんは次の様に感想を述べたと山陽新聞はしるしてあります。「インドの平和運動がガンジーの歩くことによつて始められたように東京まで歩き続け、八月東京で開かれるオ四

回原水爆禁止世界大会を成功させたい。一般の人々も一歩でもこの行進に参加され世界平和達成のため協力してほしい」と。この一言隻句の言葉の中から、この人がガンジーの思想からの程度影響されてゐるのか分らないが、ガンジーの思想と今回の運動は甚しい距離にあると思ひます。ガンジーは今日の文明社会では時代錯誤とも思はれる様な原始的な方法をとつたが、彼はヨーロッパの実態をよく知つてゐたから、最も対蹠的なアジアの生活の手ぶりで対抗したにすぎないと思はれます。その象徴があつた「糸つむぎ車」なのです。その精神は毫もヨーロッパの繁榮を羨むものではなかつた。ヨーロッパの繁榮を得ようとするは必ずインド本有の道徳的生活が崩壊することを知つてゐたからです。

此度の平和行進はマスコミを通じ、組織(原水爆禁止関係団体、及至地方自治団体)を利用しての方法でした。この点から言へば一人の人間が千キロ歩き通すという原始的方法乃至アジア的の見せかけに便乗して巧妙に計画された近代的動員方法でした。

この問題については朝日新聞の天声人語は「この平和行進は日本が本家ではない、今春四月米英がその口火をきつた。米国ではペン

シルバニア州など五州の都市や村からニューヨークの国連本部まで百数十キロ五日間の平和行進があり、十才の少年や六十才の盲人も加つた。英国ではロンドンからオールドマストンの原子兵器研究所まで八十キロ四日間の核兵器抗議行進が行はれた」とかいてあります。天下の大新聞が事実に対し何ら一見識を示さないのは現代の通弊ですが、この問題に關して、どの新聞も見るべき言論を示しませんでした。只同じ様にあの悲しい乗鞍型慰霊碑の前でアフリカ仏領スーダン平和委員会が一書記ジャバツテ・マドウ氏とスクラムを組んで行進する人々を大きく写したにすぎませんでした。

行脚方法による人工的デモスタイルがどの様にその写真よりも今日の課題を提起してゐるのか、一度はゆつくり考へて見ようではありませんか。

教育は誰のものか

ものが合理的判断に依つて決定せられず所謂政治的判断乃至圧力に依つて強行せられることは今日悪弊の最たるものである。これは現自民党政府もさうであるし、それに

對抗する進歩的？日教組も然りである。各学校の学校長の中にはちつぽけな政治性を持ち、それを以つて得々としてゐる人達がゐる。おしなべてボス論理横行の時代である。必然政治は陳情政治、強訴政治の様相を呈してくる。

さて学校施設を整備拡充することは良いことだが、それよりもっと大切なことは教育内容の充実ということだ。ところが今日施設を整備拡充することは学校長の重要な責務になつてゐる。だから政治性のある(この政治性という奴が奇妙なものだが)校長はPTAを動員する。例えば最近こんな例がある。某中学校だが本年度新築予定の木造教室を鉄筋に改めて欲しいといふ。それは火災予防上から言へば論としては当然の話だ。ところでその次がある。曰く、もしもこの要望が聞き入れて貰へないなら最悪の場合本年度新築予定の木造教室を返上すると云ふのだ。一体教育は誰のためにあるのかと言ひたい。勿論子供の為のものだ。その子供の為に計画された教室が鉄筋にならぬという理由で何人がこの計画を拒否する資格があるのか。世にも不思議な物語である。本末顛倒である。こんな例は世上多いことだ。そしてその最大のものは動評

に反対する日教組である。

俗に丹頂ツルと言はれる日教組が、勤務評定を強行しようとする政府に対し、絶対反対を叫んでいる。強行しようとする文部省にも絶対反対を叫ぶ日教組にもそれ／＼それを妥当なりとする論理を持つている。しかしこの両者には共通の話し合ひの場はない。即ち地方公務員法才四十条ならびに地方教育行政の組織及び運営に関する法律才四十六条の規定により勤務評定を行はうとする教育委員会側と、根底においてその様な法律を否認しようとし、且つこの反対闘争が反動岸政府を打倒し、わが国の自由と民主主義、独立と平和を守る抵抗だと呼號する日教組とは全く相容れる余地はない。

今日の大新聞が紛糾する問題に直面した時に使ふ常套手段として、冷却期間をおき、話しあつて解決の糸口を見出すこととしてあるが、成程尤もな常識論と云はれる中に、問題の本質を晦冥にし、ひいては無要の混乱を今後も惹起する恐れが十分にある立論だと思はれる。

パラドックスな言ひ方をすれば、今日勤務評定問題をまき起した最大の原因は他ならぬ日教組自身の行爲である。組合指導者の政治

もつ教師は勤務評定を恐れない。敢て言へばその様なものには無関心なのである。それよりも最も緊張した教育的雰囲気を感じたのである。それは全身全霊をあげて生徒に教へるということだ。正確な知識を与へるということだ。人間が魂を持つてゐる限りにおいて、このまっとうな教育者の自信ある態度はいつの世にもいづれの国においても正しい。

最近市内の中学校において、下級生にリンチを加へて死に至らしめた事件が起つた。旧制の中学にも鉄拳制裁はあつた。しかし西部劇モドキに二人で両腕をかゝへ、他の一人をして殴打せしめ、卒倒に至らせしめるが如き悪辣さはなかつた。昔と今の違ふところのひとつは人間の行爲に無邪気さが少なくなつたことである。この様な人心の残虐さがどこに緣由し、いづこに原因してゐるのか、父兄として教師として考へるべきところは実に多い。その様な我々の身辺に起る、難問題をひとつ／＼着実に解決し、変革しようとする態度、これが今日我々の前向きの正しい姿勢ではないだろうか。戦中戦後我々にはや空疎な指導理念には飽いてゐるはずだ。

くりかへしていふ。教育は国民のものであり、その実践は子供の為にある。どうすることが一番子供の幸福になるか、全ての教育的行爲はこゝから初まらねばならぬ。

的偏向は大多数の国民のヒンシユクを買つてゐるのである。しかも瀕々として起る教育の不祥事件は「修身」ということを国民に考えさせ（これは必ずしも修身科の復活といふことと同一の意識ではないが）又教員の勤務評定ということも考へせしめられるのである。

加ふるに勤務反対の闘争が開始せられ、その事実を見聞した時、本能的に国民は益々教師の勤務が必要だと感じたのだ。一斉休暇、早退、座りこみ、罵倒、暴行、カンヅメ、等一連の闘争行為は教養深く子供を愛する教師の態度とはどうしても受け取れなかつたのだ。何故さうまでして反対しなければならぬのであろうか。人事の管理上いづれの国でもいづれの社会、階級でも勤務に対する評定は行はれてゐるのである。ソ連の如きは最も厳格な教師の能力判定をする国である。論議すべきは勤務の内容の公正にあるのであつて勤務そのものに對する否定ではない程だ。これに對して教師の特殊性をいふものがある。しかし教師は労働者なりとして、この特殊性（聖職意識）を真先に抛棄したのは他ならぬ日教組自身であつたのだ。

県教組支部が市民に對して流した印刷物に次の様に書いてゐる。「一人一人の子供と

心のつながりを持ち、じっくりと事実にもとづいて考えたり話しあつたりする力をつけようとする今の教育に對し、力の前には言いなりになるような子供、考える力を持たない子供が出来る」ということと一体何の関係があるのだろうか。この文章のどこに、切れば子供を愛する血がながれてゐるのか、ことごとく顧みて他を言ふ類である。子供はガシにされている。これで日本の子供が良くなる教育が行はれてゐると言へるだろうか。京都では勤務反対と教育環境改善を要求して七月八月同盟休校した高野中学と養正、養徳両小学校の子供達約二百人が京都府庁に押しかけ、「知事に会わせろ」と府会議場に座り込んだと新聞は伝えてゐる。宛然、教組の闘争行爲の縮刷版である。

我が国のまっとうな教育者達は権力に對しては無関心の態度を示して子供一人一人に熱情をそゝいだのである。今もバックボーンを

アンケート (23頁から) つづき

鈴木助太郎

作家・昭和女子大助教授

お答へに代へて

「日本浪漫派」についてアンケートを求められ、二ヶ月ほど「浪漫派」について調べて見たのですが、お答へすべきものを得られませんでした。

「日本浪漫派」が、活躍した当時、小生は中学の二、三年頃だと考へられます。(三年生の冬に戦争が始まつたのです)ですから、小生はその雑誌を読んだことも、手にして見たこともありません。現在でもさうですが、小生は同時代のものには余り興味を持たず、雑誌の如きも、殆ど目を通しませんので、当時高名だった(らしい)「浪漫派」も知らずに来たわけです。浪漫派と目されてゐる小生がさりとは不思議と思はれるでせうが、事実です。から仕方がありません。

保田与重郎氏の名前は、中学時代にしばしば本屋で目についたものです。「南山踏雲録」は、菊地寛の「天誅組龍通る」で、伴林光平の名を知つてゐましたので、パラバロと手

にして見た記憶があります。高等学校の時、国文の教授が、杉浦正一郎氏で、氏から時々保田氏の事をきかされました。氏と接觸したのは戦後、それも、昭和二十八年、小生が大坂へ転任してからです。氏の数ある著書も、それ以後読む機会を得たのですが、二十五年、祖国社より刊行した「日本に祈る」を大層立派なものに思ひ、今に傾倒して居ります。作家では故太宰治と中谷孝雄氏が好きです。良く知りませんが、これらの優秀な文学者を、「日本浪漫派」が生んだものとすれば、小生は「日本浪漫派」を非常に立派なものと思ひます。又、親近感も覚えます。尙、その母胎(？)といはれる「コギト」でさへ、小生が現実を目にしたのは、つひ先日、林富士馬氏の宅に於てでした。

以上が小生と「日本浪漫派」の關係のすべてです。前述の如く、世人から、「浪漫派」の一人と見られてゐる小生として、われながらをかしい位なものであります。

(仮名遣 原文のまま)

保田 大率などコギトと言ふ外国の名前はイカンなどと言っていました。これなんか便乗主義のあらはれですよ。バスに乗りおくれるといふ言葉はあのころから流行りましたな。

保田 え、私を書いたんですわ、あの広告には何か抽象的なことを書いて気焔をあげましたよ。何か悠遠なあれがれみたいな心情を持ってました。それを書いたんですよ。雑誌作

保田 わしがつけたんやろな。日本浪漫派の広告をコギトに載せたら、雑誌がまた出ようから、みなもう雑誌が出たと思ふとりましたな。林房雄が赤で下獄する時、みなあつまつて送別会をやりましたが、そこで林は、今度監獄から出てきたら日本浪漫派をやるんやと云ふてえらい気焔をあげられましたな、みなびっくりしてたわ。まあさういったもんなつたな。バクく〜ととったもん。

清水 シェストフなど大分言はれてましたね。保田 え、時代が一変したのは昭和十三年からですね。支那事変の動きがはつきりしてから、新聞などの態度がはつきり変わってききました。

清水 あの当時の混乱した思想界あるひは時代の影響といった面はありましたのでせうか。保田 昭和九年十一月号でせう。記者 昭和十年三月創刊になってます。

保田 わしがつけたんやろな。日本浪漫派の広告をコギトに載せたら、雑誌がまた出ようから、みなもう雑誌が出たと思ふとりましたな。林房雄が赤で下獄する時、みなあつまつて送別会をやりましたが、そこで林は、今度監獄から出てきたら日本浪漫派をやるんやと云ふてえらい気焔をあげられましたな、みなびっくりしてたわ。まあさういったもんなつたな。バクく〜ととったもん。

保田 昭和七年か。大学に入って次の年の春ころになりますね。清水 コギトは大阪高校の出身者が同人だったのですね。保田 さうですね。田中克己、中島榮次郎、肥下恒夫、三浦常夫、緒方隆士その他の外にもあります。コギトは大阪高校時代から着想してました。

保田 あれは中谷孝雄が何かやらんか言ひ出したんです。当時他の人がやつとることがいやになつてゐたんですよ。それで、何か周囲から調子をはずすことばかり考へてましたな。記者 あの当時の混乱した思想界あるひは時代の影響といった面はありましたのでせうか。

保田 わしがつけたんやろな。日本浪漫派の広告をコギトに載せたら、雑誌がまた出ようから、みなもう雑誌が出たと思ふとりましたな。林房雄が赤で下獄する時、みなあつまつて送別会をやりましたが、そこで林は、今度監獄から出てきたら日本浪漫派をやるんやと云ふてえらい気焔をあげられましたな、みなびっくりしてたわ。まあさういったもんなつたな。バクく〜ととったもん。

保田 え、時代が一変したのは昭和十三年からですね。支那事変の動きがはつきりしてから、新聞などの態度がはつきり変わってききました。清水 十年はやはり一つの時代の契点ですね。保田 大率などコギトと言ふ外国の名前はイカンなどと言っていました。これなんか便乗主義のあらはれですよ。バスに乗りおくれるといふ言葉はあのころから流行りましたな。

保田 え、私を書いたんですわ、あの広告には何か抽象的なことを書いて気焔をあげましたよ。何か悠遠なあれがれみたいな心情を持ってました。それを書いたんですよ。雑誌作

保田 わしがつけたんやろな。日本浪漫派の広告をコギトに載せたら、雑誌がまた出ようから、みなもう雑誌が出たと思ふとりましたな。林房雄が赤で下獄する時、みなあつまつて送別会をやりましたが、そこで林は、今度監獄から出てきたら日本浪漫派をやるんやと云ふてえらい気焔をあげられましたな、みなびっくりしてたわ。まあさういったもんなつたな。バクく〜ととったもん。

右翼と左翼

保田 昭和七年か。大学に入って次の年の春ころになりますね。清水 コギトは大阪高校の出身者が同人だったのですね。保田 さうですね。田中克己、中島榮次郎、肥下恒夫、三浦常夫、緒方隆士その他の外にもあります。コギトは大阪高校時代から着想してました。

保田 あれは中谷孝雄が何かやらんか言ひ出したんです。当時他の人がやつとることがいやになつてゐたんですよ。それで、何か周囲から調子をはずすことばかり考へてましたな。記者 あの当時の混乱した思想界あるひは時代の影響といった面はありましたのでせうか。

保田 わしがつけたんやろな。日本浪漫派の広告をコギトに載せたら、雑誌がまた出ようから、みなもう雑誌が出たと思ふとりましたな。林房雄が赤で下獄する時、みなあつまつて送別会をやりましたが、そこで林は、今度監獄から出てきたら日本浪漫派をやるんやと云ふてえらい気焔をあげられましたな、みなびっくりしてたわ。まあさういったもんなつたな。バクく〜ととったもん。

対談 日本浪漫派とその周辺

昭和時代も三〇年を経過した。そこで最近昭和文学史を通観し、形成しやうとする気運が隆ってきた。

さきに近代文学同人の分担執筆による「昭和文史」（角川書店）、今年になって「国文学の解釈と鑑賞」（至文堂）が一月号で「昭和文学史」を、又、「文学」（岩波書店）が四月号で「日本浪漫派を中心として」「昭和の文学」をそれぞれ特輯してある。

そのなかで一番論議の対象となつてゐるのは、日本浪漫派の文学運動が、昭和の文学史あるひは思想史の上で、どんな意義をもつものなのか、それをどう位置づけたらよいかといつた問題です。もちろん、終戦の日からのち、日本浪漫派は、散発的ながら一部の

人々から批評の対象に取上げられて、論議もされてゐる。そして、渺からず批判の言葉も聴かれるやうです。だが、そこにきかれる功罪の多少、毀誉褒貶の声を超へて、もっと虚心に省察するならば当時の深い混沌から生誕した日本浪漫派の文芸運動は、「時代青春の歌」として大きな意義をもつてゐるのではなからうか。

我々はこの昭和十年前後の混沌を冷静にさぐることによって、昭和三〇年代の歪曲した青春の秘密を明らかにしたいと思ふ。幸ひ機会を得て、こゝに「日本浪漫派」を代表する評論家保田と重郎氏と、かつて国文学雑誌「文芸文化」の同人であり、国文学研究に新分野を拓かれ、和泉式部研究で著名な広島大学清水文雄教授との対談を企画したのである。この対談によって「日本浪漫派」とその周辺の雰囲気をも多少なりとも理解していただければ幸ひです。

語る人 保田 與重郎
評論家・詩人
清 水 文 雄
広島大学教授
（バルカノン編輯室）

記者 保田、清水両先生には、この山峡の温泉まで遠路お越しいただき大変有難うございます。お疲れでございませうが、今席は、清水教授に聞き役になつていただきます。保田先生に日本浪漫派とその周辺について、語っていただきますと思ひます。ではお願い致します。

日本浪漫派創刊のころ

清水 日本浪漫派の創刊のころから、順次にお聞きませうかね。

保田 もう古いことで、みな忘れてしまひましたよ。現在、文筆で食つてゐる者はある意味では商売してるやうなもんですからね。私とつきあつたと言ふだけで嫌ふ人も多いから、こちらは今まで黙つてきました。商売の邪魔になりますもんね。（笑声）

清水 忘れるところが浪漫派らしい。あの当時は気分・雰囲気ですね、浪漫派は、コギトは日本浪漫派の前ですが、大学に入られてからですかね。

保田 大学に入つてからですね。（記者に）あれは何時だったかね。

記者 昭和七年五月創刊でせう。

左翼は右翼の庇護をえらううけとるが、右翼は左翼に何もしてもらへん。
記者 竹内好だったか、先生が大阪高校時代に、アツ・プロ小説か何か書いて懲戒になったとか言ってるやうですが。

保田 竹内は知り合ひですわ。そんなことないだらう。本人の俺が覚えておないもんな。それに俺は左翼でもなかったもん。しかしあの当時、左翼の連中と大分つきあつたあつた。左翼作家は知らなかったけど、非合法で動いとつた連中や。沼袋に下宿したときはアツ・ピラなんか持って来よつてな、こゝから大丈夫やいふて、俺の下宿の天井裏にかくしをるんや。あんなとこにかくしても、警察がきて調べたら、一番にバレるのになあ。呑気だったんやなあ。連中が出入りするんで、アツだとおもふたらうな、警察が俺の下宿を見張つとつたで。そんなブツソウなこゝは知らんもんな、御苦勞サマですな。いふて言葉かけとつたんや。何のことはない俺が監視されるとのや。(笑声)あの左翼の連中にはだぶ迷惑かけられたわ。夏休みが終つて下宿に帰つてきたら、下宿に置いとつた俺のもの何にもないのや。あの連中が無断で質に入れたり売つたりしとる。今どうしとるん

やろな、あの連中。

日本浪漫派・人民文庫

清水 あの日本浪漫派の広告を見て最初に批評したのは自分だと高見順が言つて居る様ですわ。

保田 何時言ふたんでせうか。

清水 文化集団——これは昭和八年六月創刊された左翼系の雑誌ですが——これの十二月号に「浪漫的精神と浪漫的動向」と言ふ文章を書いて居るのです。

保田 そんなこと書いたんでせうね。しかし高見も別段日本浪漫派の広告がはつきりわかつて言つたんぢやないでせう。広告自体が何か悠久な、抽象的なこと言ふてましたもんね。記者 高見順は先生の文章を読んで眼くるめくやうで、もう自分には理解しがたい新しい時代が来たのかといつて嘆息したさうですわ。

保田 さうかもしれんな。高見は元来コンプレックスもつた男や。

記者 昭和十二年六月の報知新聞で日本浪漫派、人民文庫討論会が行はれたのですが、どうだつたんでせうか。

保田 そんなことあつたですか。

記者 え、日本浪漫派から先生と、亀井、中谷の三人。人民文庫からは高見、新田潤、平林彪吾の三人が出席し、その討論会の速記録は八日間に亘つて報知新聞に載つたやうです。

保田 さうか。それぢや、やつたらうな。しかし、そりや問題になりませんわ。人民文庫はどうか知らないけど、吾々は人民文庫など問題にしとらんかったでせうからな。

記者 一部の人は日本浪漫派と人民文庫を転向といふ幹から派生した二本の枝だといつた見方をしていますが

保田 日本浪漫派は転向などに原因して作つたもんでもないし、転向問題と対決もしてないしな。しかし、結果から見ると、日本浪漫派は左翼をだいぶ転向させてゐますな。それを見て言ふ人は何とでも言ふだらうがなあ。

清水 日本浪漫派は「現実」「コギト」「青い花」「麴麴」などの同人が集まつてますがやはりコギトが主流の様ですわ。

保田 さうですな。やつぱりコギトが中心みたいですね。外の同人雑誌は解体したけど、コギトは昭和十九年まで続けて出しています。終りごろには紙がなくて、印刷屋に行つて海軍の紙の余りを集めて刷つとりました。一冊の

雑誌が色々な紙を使つて出来てるんですよ。

「青い花」はオ一号を出したぎりで、日本浪漫派に合流してきたんですよ。「青い花」から太宰治、伊馬鶴平——戦後伊馬春部いふとります。折口信夫さんのお弟子さんですが今ラジオドラマ書いてますね。それから中村地平、今官一もそうですね、それから山岸外史がゐますよ。戦後又共產党に入つたりしてましたが、まだをるんでせうかね。はつきりせん男でしたわ。

伊東 静 雄

清水 伊東静雄さんは、「呂」でしたかね、それに詩を発表して、コギトに入つたんですね。保田 伊東は、あれは京都大学を出て、大阪で住吉中学校の国語の先生してゐました。「呂」といふ、カリ版刷りでしたわ、四頁位の詩の雑誌です。それに詩を載せてゐたのを田中克己がみつめて、え、詩人がをるいふて連れてきたんでせう。

清水 伊東さんの詩は非常によかつたですね。深いものがありましたね。私たちが伊東さんにはじめて会つたのは、昭和九年の、たしか夏だったと思ふのですが、今、成城大学にある栗山理一と池田勉が大阪にゐましてね。終戦直後馬車のシヨホールバルで死んだ

蓮田善明も広島から出てきてまして、その四人で栗山の家であつたんですよ。みんなで少しのお酒で楽しくなりましたね。伊東さんが朔太郎の「帰郷」や自作の詩を朗読しましたな。このつてゐるんですよ。伊東さんの詩から、私たちが、古典の正確な読方を随分教へられたんですよ。後に吾々同人が「文芸文化」の発行を發願したのも、伊東さんとの縁が、決意を与へて呉れたやうなものです。伊東さんのオ一詩集の「わがひとに与ふる哀歌」がコギト發行所から出た時、朔太郎さんが大層ほめましたね。

保田 あの詩集出したとき一番よろこんだのは萩原朔太郎ですよ。藤村以来の抒情詩人やいふて、えらうほめてくれましたな。朔太郎は本格的な抒情詩やいふてえらうほめたけど伊東の詩はあの頃の抒情詩と大分ちがうとりますわ。沈酒したやうな、あゝいふ深い詩想は、一寸世俗の目つきませんよ。私も尊敬してましたね。齢も少し多かつたし自然敬愛を表する形だつたでせう。伊東は、東京ではきらはれとつた様ですねえ。それが、東京の詩人の痛いとこを伊東がつくからですよ。

大正から昭和にかけての詩人はやつぱり、佐藤春夫と萩原朔太郎、それに大木惇夫でせうね。昭和では宮沢賢治、伊東静雄と、それ

亀井勝一郎・田邊耕一郎

清水 「現実」は亀井勝一郎さんが代表したかたちですか。

保田 さうですな。

記者 コギトに載りました日本浪漫派広告には、オ一回の広告は先生と中谷孝雄、神保光太郎の三人の名で發表されてゐたと記憶してゐますか。

保田 神保がなあ。ぢや神保が一番早い同人やな。中谷は雑誌作らんか言ふた本人やもんな、亀井はどうかな。

記者 二回目の広告に亀井と緒方隆士の二名が加つて五名になつてゐたと思ひます。

保田 亀井も早い方やつたもんな。

記者 亀井勝一郎に大和古寺風物誌など大和の古寺、仏像に関する著書がありますが、日

本浪漫派のころからなのでせうか。
保田 さうだな。はじめは仏像や寺院などあんなもん貴族趣味やいふてキメつけとったな。後には大和地方を大分旅行して廻って来たけどな。

記者 「現実」の同人は、日本浪漫派と人民文庫に分流したと言見方があるやうですが実際の当時はどうだったんでせうか。

保田 人民文庫は日本浪漫派よりあとに出たもんな。分れたも何も無いわ。亀井など日本浪漫派に入っただけ、他の連中はいれてもらへんかったんだよ。その連中が人民文庫に行つたぢやないのか。

私は入りたいもんは誰でもいれるつもりだった。それを左翼だった連中が資格審査をやるんですよ。どうしてあんなことしたのかな、左翼の連中は兎に角資格審査をうるさう言ふとつたな。

記者 「現実」にゐた田辺耕一郎は、日本浪漫派同人だったと間違はれて非常に心外だと、怨懺にたへないやうに言つてゐますが。
保田 田辺耕一郎は日本浪漫派の同人ぢやない。はつきり覚えとるわ。そりや間違はれたら怒るだろ。田辺は左翼だった連中のやつた資格審査で落ちたんや。理由は何か言ふとつたな。俺は始めから終りまであれの弁護してやつたんだがな。俺があまり弁護してや

るので皆は変におもつてゐたな。田辺も今ぢや審査に落ちたの喜んどるだらう。

芳賀檀と現代語

清水 芳賀檀さん、大変張切つて居られましたね。あの方は発想も文章も大層独特なものとしてね。

保田 芳賀檀が、ナポレオン・ボナパルトと云ふ文芸評論をかいたんです。あれを讀んでみんなは譏刺か思ふとりましたな。(笑声)どこにもない発想やつたんです。みなびつくりしましたよ。折口信夫さんが、おやじさんは判りやすい文章かいたが、息子の檀のはむつかしい判りにくい文章やなあ云ふとられましたわ。芳賀は自分で言葉作つてますな。芳賀の作つた言葉は戦争中でも、政府や軍部の発表などにも随分使はれたが、戦後にもよく使はれてゐますよ。今の人もギョウサンありますね。戦争中は右翼がよう使つた言葉、戦後共産党が使つたりしますが、みな芳賀檀が作つた言葉ですね。漢字を上と下とひっくり返して使つたりして、一寸斬新に聞えますからね。何々を決意するとか云ふ言葉使つて、最初は何のことか判らんかった。戦争になったらどこでもみな使つたりしましたね。さう言つた調

子で芳賀檀は現代語をギョウサン作りしましたな。えらい功績ですわ。

あの頃ヒットラーが抬頭した頃ですが、芳賀檀にヒットラー批判させても、あれの言葉にかゝるとほめとるのかくさしとるのか判らん云ひ方する人ですね。それで結構ほめとるんですわ。左翼の連中はくさしたんや思ふて喜んでゐるんですからな。(笑声)

しかし、考へて見ると吾々もだいたい言葉流行さしましたな。有差とか、伝統を愛しむとか、混沌とか、イロニイなど随分はやつた言葉ですね。神話といふ言葉もさうですな。

芳賀檀はあの頃、三高のドイツ語の先生やつてましたが、講義のあるときは京都に下宿しとつたんぢやないかな。週一度東京に帰つてくるんですわ、いそがしい先生でしたな。

肥下恒夫・大山定一

清水 肥下恒夫さんなんか、随分縁の下の力持ちの仕事をするに知られずやつてをられましたな、まったく頭が下りましたね。

保田 肥下がをらんかったらコギトも日本浪漫派も出とりませんな。肥下が河口憲海から金ひっぱつて来たんですわ。肥下のお父さんが河口憲海の西蔵潜入に金を出しとられたんですね。

清水 今どちらに居られますか。

保田 いま河内に一堺に近いところですー大阪の家が戦災で焼けたので帰つてゐますよ。

あのあたりの豪族です。何代か前、幕府の許可をもらうて海外貿易してゐたらしいですな。

私が大阪高校にはいつたとき、半歳ぐらひして彼の甥かなんかの独文の先生がつれてきて、みんなに紹介しとりました。その時二年目だったんです。全然学校へ出んのですよ。コギトは肥下が発行人だったはずですよ。

河内では毎年大和川の氾濫で困つてゐたんです。それを肥下のおじいさんが莫大な私財を投じて大工事したさうですよ。あのあたりでは金持村のために金を使ふしきたりがあるんですな。

日本浪漫派の創刊号は私が編輯しましたがあとは誰かやつたのか覚えとりませんね。創刊号のときは大山定一がえらう手伝つてくれました。大山ほど、自分のことゝなるとなまけ者はゐないのに、他人のことゝなるとエラウ熱心にやる男もゐませんね。出張校正までやつてくれましたわ。大山がをらんかったら創刊号何時出たか判りませんね。

田中克己・檀一雄・外村繁・吉野吉晴

記者 詩人の田中克己さん、処女詩集の「西

康省」はコギト発行所から出版されたのですね。戦後「戦後吟」といふ短歌集、詩集「悲歌」を出して居られますが、拜見しまして仲々骨のある方ですね。田中さんの短歌は加納諸平か伴林光平の歌の様な美しさが感ぜられます。

保田 田中は大阪高校のときから短歌作る仲間だったな。伊東も田中も短歌の発想だな。田中は顔に似あはんな強いつとあるんや。軍人に對しても強かつたな。ほかに、檀一雄、外村繁、牧野吉晴なんかも軍人に對してえらう強かつたな。牧野は情報局の何とか中佐が俺の悪口云ひを、たいふのでわざわざ追っかけていつて、それを熱海でつかまへて、たうとうあやまらしてきてるんや。田中は陸軍の研究所に怒鳴りこんで、大分いきまいらしいな。青年将校が斬つたる云ふて、剣呑になつたんや。そこへ大場駱平が出て来て、上等の部屋によんださうや。軍人いふのは扱ひの格が簡単にかたがつくんんだな。

外村は中谷孝雄などと省線(現国電)の中央線で酔つぱらつて帰るとき、若い将校などが酔つぱらつて大きな顔して乗つとると、小さくなれいふて叱りつけをるんや。(笑声)

相手も酔つとるもんな、それで騒ぎが大きくなるよ、中谷が出ていつてさばきををつける。中谷はなか／＼風格があるもんな。すぐをさめ

て来をるわ。

伊藤佐喜雄「花の宴」

清水 創作の面ではどなたの作品でせうか。檀一雄、外村繁、中谷孝雄、伊藤佐喜雄、太宰治さんなど多士落々でしたか。

保田 伊藤佐喜雄の「花の宴」が一番あてやかな小説でしたな。出てくる人物が百何人か居るんですわ。それをノートに控えとつて一人づつ殺して行つてるんですね。こうせいな小説やと思ひましたな。

伊藤はそれを毎日九州から送つて来るんですわ。伊藤はカリエスか何かで足が動かんで、九大の附属病院に入院してたんですよ。そのころ整形手術は九大が一番進んでゐたんで、伊藤はそこに入院してて書いて寄こすんですよ。それで、私はわざ／＼九州まで「こんなエ、小説かけるんや」たら足の一本位ケチ／＼せずつて切つて捨て、もかまわん」と言ひに行きましたら、伊藤はえらううらみに思ふとりましたな。すまんこといひに行つたもんだと思つてますよ。

大木惇夫・武田麟太郎

記者 佐藤春夫、萩原朔太郎さんらは日本浪

曼派に入られたのですが、大木悖夫さんはどうだったのですか。

保田 入っていないな。大木悖夫は広島の人だらう。戦後、俺は小説ほとんど読んでないけど彼の「緑地ありや」は読んでた。彼の自叙伝を小説にしたのだが、いゝ作品だな。「風・光・木の葉」は彼の処女詩集だが、若い時読んでたんだな。

記者 ジャワ作戦に徴用で従軍してまして、文学者のなかでは最年長位だったのでせうが一番張切つとられました。

保田 ジャワで作った詩を集めた「海原にありて歌へる」はえゝ詩集や、

記者 先生も大分ほめて居られましたね。あれはジャワ島で軍宣伝班が出してゐた「赤道報」と云ふ新聞半頁大の現地新聞に載った詩——勿論輸送船中の作品もあるのですが——それを集めた詩集です。兵隊のなかでも愛唱する人が沢山ありました。

保田 俺、あれのジャワ版もつとるで。あの詩集、活字がそろはるので写真で縮めたりして手間かけたさうやな。

記者 活字を一字々々写真で縮小して、あんな経費をかけた詩集はないとかいはれてました定価は一円二十銭位だったと思ひますが。

武田麟太郎はジャカルタのスマトラ・ウエツヒに住んでゐまして、私の宿舎からほんの

近くだったのです。それである時、「若い時赤だつたさうですが、今顧みてどう考へられますか」と聞いてみたら、「あの頃の青年の熱病みたいなものだ」といつてました。

保田 そんなもんやろな、ジャワにも小説家は沢山行つたが、武麟が一番仕事してました。現地の民衆の中に入って、民衆と結びついた仕事は武麟が一番よくしてました。

清水 佐藤春夫さんが、ジャワに行かれましたね、スラバヤで蓮田善明に会はれて、その時蓮田が佐藤さんに托した歌があるんです。

「文芸文化」の終刊号——昭和十九年八月に出したのですが——それにのつてゐる「おらびうた」がそれです。これが蓮田の絶筆になつた訳です。蓮田はそれからスンバ島に渡りそれから更に馬來半島に帰つて、そこで終戦直後自決したのです。

伝承の文藝

清水 「日本の橋」は当時、架橋の精神を語つてたいへん劃期的な評論でした。あの文章のなかにある、熱田の精進川にかゝつてゐる裁断橋には、わざ／＼途中下車して見に行つたものです。あの堀尾金助といふ若武者のお母さんの銘文が、また大変美しい文章で、母心のもつ永劫の悲哀といつたものかじみ

出てゐますね。

保田 あのなかにでてる日本の橋はみな見て歩きましたよ。「日本の橋」はあの当時としては一等はやゝ日本的な著述だらうと思ひます。考へて見ますと、あの前後に書いた日本武尊・後鳥羽院にしても、木曾義仲や「明治の精神」にしても負けることばかりいつてゐます。敗北の詩心といつたものを書いてゐた訳です。当時、威勢よく勝つことを口にしてゐたのは左翼でしたよ。

記者 「日本の橋」——戴冠詩人の御一人者——「後鳥羽院」を読まして、日本の古典、文芸の美しさに眼をひられ、大変な感銘でした。当時、学校で国文学を学んでゐましたが詳細な訓話の学ばかりで——勿論学問の基礎として必要ではありましようが——どうして生々しい文芸の生命のえあがるものを教へて呉れないかと思ひました。

保田 「戴冠詩人の御一人者」や「後鳥羽院」は大ザツパなものです。俺としては、のちに「民族と文芸」に入れた「日本武尊楊貴妃」になり給ふ伝説」の様な民衆のなかに語り継がれた伝承を文芸の上で学問的に啓いてゆきたいと思つてゐる。

いま残つてゐる古文書なんかを、古文書学としてひねくり廻すだけでは何にも出てこない。古い資料を類推して行く上で、江戸時代の

国学者が注釈し規定した範囲だけは、吾々は安心して援用して足がかりと出来る。実証的学問の方法で、それに小説的結論を与へる態度を採つてゐる。戦後、特に私の興味と学問は、この方向にむかつて、今まで歴史学者も国文学者も研究しなかつた成果を挙げるとるわ。

学習院時代の三島由紀夫

清水 三島由紀夫が学習院中等科にゐる時、日本武尊について書いて来ましたので、保田と重郎氏に日本武尊についてのエッセイがあるから読んでごらんといつて「戴冠詩人の御一人者」を教へてやりました。さういつたところから、多分日本浪漫派の詩情に深く触れて行つたのだと思ひます。それで保田さんのお宅にもお訪ねする様になつたんですね。

保田 あれは何時でしたかな。訪ねて来ましてね。その時、もう大分食糧難の時代でしたよ。三島が女子学習院に辦当泥棒の入つた話をしりました。原稿用紙にして二、三枚位のことだけだ、それを面白う話してましたわ。それ聴いて、もう少し勉強したらいい、小説書きになれるないふ予感がしましたね。

清水 伊東静雄の詩を愛読してましたね。それで、徴兵検査で国に帰つた時——兵隊の方は即日帰郷になつたのですが——堺に伊東さ

んを訪ねたのです。

「花ざかりの森」は、中等科の時書いてたんですが、彼が高等科に進学してしまつたから、吾々のやつてゐた「文芸文化」に載せたのです。「花ざかりの森」の前に習作が沢山あります。

日本の浪漫派文学的功績

記者 保田先生、戦争中官憲の圧迫があつたやうに聴いて居りますが、何時ごろなのですか。

保田 そうやなあ。十八年の暮ごろからかな。政府に協力せん言ふとるのや。尾崎士郎が逮捕されるぞ云ふてエラウ心配してくれたな。

家に私服の憲兵が来とりましたね。御苦労サンですな。いふてお茶なんか出してねんごろにしとつたな。(笑声) 近所に航空總監の何とか中将が居つてな、そこ俺のうちのや。憲兵が居るの、警戒して呉れとるんやと思ふとつたら、俺の方は監視されてたんや。(笑声) 記者 先生の応召は、懲罰的なものだったのですか。

保田 そんなことはないと思ふけどなあ。俺のところに召集令状が来たたら、その憲兵が、令状が来る訳ないいふて、俺の郷里の聯隊に連絡とつて解除してくれとりました。一生懸命奔走して呉れましたなあ。

記者 最近、日本浪漫派に対する批判が出て居りますがお読みになりましたか。

保田 読まんわ。何かいふとるんやろ。

記者 まあ色々批判してゐる訳ですが、昭和三十年になりましたし、昭和文学史を書く場合、日本浪漫派に触れない訳にゆかないのです。それで国文学者は昭和文学史のなかに日本浪漫派を定着せしめなければならぬのです。ところがその評価が複雑でなかつた定まらないといつた実状の様です。

保田 そりや、国文学者は困るやろなあ。

清水 最後に、日本浪漫派が昭和の文芸に与へた影響は非常に大きなものがあるのです。一番大きな文学的功績を、保田さんどう考へて居られますか。

保田 色々ありますが、やつぱり日本の文芸に新しく歴史を与へたことじやないかですか。系譜を樹てたことです。だから、いま日本浪漫派に対して色々批評する者が居ても別箇に新しい系譜をたて、立論しない限り、私としては、正面から論争する気なんかありません。

記者 夜も深くなりました。その静けさを河鹿が鳴き源氏蟹が飛んで、もう夏の風情です。それにしても冷えこみがひどい様です。お疲れのところ長い時間大変有難うございました。(文責 隠岐)

回顧・日本浪漫派

保田と太宰

伊藤 佐喜雄

私が日本浪漫派に「花の宴」といふ長篇小説をかき、芥川賞候補になつたりしたのは、山陰の郷里で病を養つてゐる最中で、まだ東京の同人たちとは顔を見識らなかつた。

おそまきに上京した私のために、同人会をかねた歓迎会がひらかれ、そのころひどいモルヒネ中毒で、出席を危ぶまれてゐた太宰治が、ステッキにもたれながら船橋からやつて来て、みんなの拍手を受け、私もうれしくなって自身の病氣もわずれ、種一雄といつしよにおそくまで飲んだりしたものだ。

そのときの会場だつた新宿の帝都座の地下のレストランが、いまは愚連隊のたまり場になつてゐるといふうわさで、今日べつに驚くほどのことではないが、その入口の前を通るたびに、いつも懐しいやら味気ないやらの感じがする。

その上京のとき、私は保田与重郎の高円寺の下宿に厄介になつてゐたが、寢床の中から保田の仕事ぶりをながめてゐると、おそろしく

それにくらべると、臆面もない文学シヨウを演じて、ギャランテイと見かけの人氣に満足してゐる、今日の流行作家などは、まことにスニプにうかがふ脂のごとくはかない存在、言はねばならぬ

花、今もなほ……

伊馬 春部

「日本浪漫派」の同人に私（伊馬鶴平——戦後、春部と改名）も名前をつらねてゐるが、もし太宰治といふ人間があなかつたら、私は永久に「日本浪漫派」とは無縁の存在であつたかもしれない。おもへばあぶない？ 瀬戸際であつた。

すなはちそれも、太宰に誘惑されて「青い花」の同人になつてゐたればこそであつて、両誌の合併ばなしがおこつたとき、「青い花」の同人はごっそり「日本浪漫派」に合流したのである。「青い花」といつても創刊号一冊きり出しただけなのであつて、同人は木山捷平・山岸外史・中村地平・今官一・種一雄・小山祐士・津村信夫・久保隆一郎・岩田九一・太宰治・伊馬鶴平その他である。昭和九年のことである。

しかしごっそりとはいつたものの、このうち何人かは「浪漫派」に参加しなかつたものもある。ここに「青い花」と「日本浪漫派」の創刊号があれが比較することができるのだが、いま手許にないのである。

2 回顧・日本浪漫派

その「日本浪漫派」も散佚してしまつて、何冊出たかさへ記憶に

ベン先の痛んだ万年筆を使つてゐるやうだから「どうして新しいのを買はないのか」と言つたら「新しい万年筆を買うだけの原稿料がはいつたことがない。ほんまにさうや」と保田は自分でもおかしさうに言つた。文学界へ原稿を持ち込みに行く太宰のお供をして、私と種とがタクシーを文芸春秋社にのりつけたのもその頃のことだ。

やがて、保田は営業雑誌にもどんどん書くやうになり、万年筆なんかは山と買えるくらいに原稿料は得ただらうが、さりとて別に戦争中のヤミ料理のごちそうを食べたり、贅沢をしてゐたとは思へなかつたし、戦後の流行作家となつた太宰にしても、やたらにはいつてくるお金を、二鷹のつまらない飲み屋なんかで、やたらにまきちらしただけで、あつけなく死んで行つた。この保田と太宰とは、実のところお互ひをあんまり好きではない風であつたが、若い人たちから日本浪漫派の二枚かんばんのやうに仰がれてゐるのは、さもあるべきことと思はれる。

太宰の桜桃忌にあつまる若い人たちが年ごと教を増すのとおなじやうに、保田の門をたたく若い人たちも、未だに後を絶たないだらう。そういう慕情は、なんだか妙に命がけみたいところがあつて、しかも涙の真砂と尽きず、子々孫々にまで伝はつて行く気配もある。読者からこんな打ち込み方をされた文学者は、現在までのところ、日本ではこの二人だけと断定してよ。

ないが、亀井勝一郎、保田与重郎等の評論は、颯爽かつ新鮮、私には一つの驚異でもあり、魅力でもあつた。太宰はこれに「もの思ふ葦」なる隨想を毎号執筆すると共に、「道化の華」等の作品も次々に発表した。種一雄が「衰運」「花筐」などでさきのよいところを見せたのも、ついこの前のやうな気がする。私は戯曲三篇と隨想数篇とを發表したにとどまつてゐる。おそろく当時よりすでに懶惰の人間だつたのだ。つまり同人としてはきはめて消極的な存在にすぎないわけであつて、今日においても私はムーヴメントとしての一翼を担つた感じなどさらさない。言つてみれば一つの交遊機関みたいなものであつた。たゞ集つて誰彼の顔を見てゐるだけで、結構たのしかつた。

それをしもムーヴメントといふのなら、それはそれでよいが、こゝろに亀井勝一郎や木山捷平、今官一などと顔を合せた瞬間、妙に顔面筋肉がほぐれ、北九州へ帰省するたびにはるばる宮崎まで中村地平を訪ねて行きたい氣になるのも、すべて「青い花」と「浪漫派」による由縁なのである。このひとことだけでも、私は太宰に感謝しなければならぬ。

日本浪漫派についての回顧

田中 克己

「日本浪漫派」広告と題する文章が僕も同人だつた「コギト」にのりだしたのは、昭和九年十月からのことで、当時、僕は学校を卒

派 業して大阪の中学の教師をしてゐた。この広告の反響がどうだったかは、それゆゑ僕には一向わからなかつたが、このころ同じく大阪の中学にとめてゐた伊東静雄に会ふと、彼はかう云つた。

「日本浪漫派どう思ひますか、保田君は役人と教師とは入れん、と云つてさうでございませぬか。」

2 回顧・日本 伊東も僕も資格がないわけである。親友中島栄次郎が発起人の一人であつた日本浪漫派に、そんなわけで僕はすゝめられもしなかつた（と思ふ）し、もとより加入しなかつた。

ところでこの時、僕に憤慨をうちあげた伊東は雑誌が発刊されると、同人に加はつてゐたので、僕は狐につままれたやうな気がしたが、それについて所信を吐いたすままでのことはしなかつた。實際浪漫派の精神には、僕の考へでは、官僚やそれに準ずる教員の精神への反逆が根本なのであつて、その意味から保田のいふことはもつともであつた。ただ伊東や僕のやうな教師にも徹底してゐない人間を除外するのは、知己としてはどうかと、いささか不満だつたが、浪漫精神にも不徹底な僕に、それを表現する資格などもとよりあるわけはなかつた。

在野の精神、これが浪漫派を貫くものだと思ふ。戦争中の浪漫派の得意をあげつらふものがあるなら、僕はいくらでも反証する。投獄され、もしくは警察へ呼出しをたびたび受けてゐた共產黨員以外には、ぬくぬくとシヤバにゐたといつて、浪漫派を非難する資格はない。軍人と浪漫派の交際の場は、僕は見たことがない。僕自身は交際せざるを得ない徴用軍属になつたが、生半箇な知識をふりまはす軍人との交際のいかに不快だつたことか。彼等は官吏であり、権力者であつて、浪漫派とは最も縁遠いものだったのである。

東がその運動の主体者ではなかつたかと云ふ気がする。――

伊東は『コギト』とほゞ同時に発足した青木敬齋編輯の『呂』に詩を書いてゐた。青木は伊東が京大に入学した当初の寺町の下宿の息子で、当時大谷女專の倫理の教師をしてゐた。伊東はこの『呂』で詩の習作期を了へたのである。ある日彼は本屋の店頭で『コギト』を見つけた。そこに田中克己と云ふ屈強な好敵手をつつけた。田中氏はまた『呂』誌上の伊東の作品が凡骨でないことを認めると、その由を編輯者の保田氏に注進したのである。昭和十年一月以降、伊東は活躍舞台を『呂』から『コギト』に移したので、『呂』終刊と同時に『コギト』に変わったと云ふ富士正晴説は誤謬である。

この頃すでに神保光太郎、亀井勝一郎、中島栄次郎、中谷孝雄、緒方隆士、保田与重郎の六氏で『日本浪漫派』の企画が進められてゐた。その発刊前に広告文だけを見て正宗白鳥氏は間違ひやすい浪漫主義より無難なりアリズムの道を選べと警告した。この事實は、浪漫主義に対して生理的な反感を抱く種属があることを証明する。

伊東書簡によると、中谷、亀井両氏の勧誘で伊東は『日本浪漫派』に参加したのである。然し、伊東は「田舎道にて」「まだ狼せざる山の夢」「水中花」位しか作品を発表せず、主体的な作品はやはり『コギト』に発表してゐた。号を追つて同人ががや／＼と云ふその狼難さがいやだつたからであらう。そこで伊東が最も賞讃したのは故緒方隆士の諸作だつた。

2 回顧・日本 伊東は昭和十年十月に処女詩集『わがひとに与ふる哀歌』をコギト発行所から出した。その出版記念会は十一月二十三日の夜新宿三越裏の焼鳥屋で開かれた。伊東は萩原朔太郎先生の激賞を浴びて面目をほどこしたが、その夜は無縁な中原中也の家に泊つた。萩原先

ジャーナリズムの独占――保田、亀井、芳賀、浅野の評論はなるほど論壇を風靡した。竹内好、福田恒厚、十返肇など同年輩のいまの優秀な評論家はみな沈黙してゐた。彼等は何をしてゐたか。抑圧されてゐたのか。抵抗してゐたのか。それとも準備してゐたのか。答は彼等が自ら行ふであらう（行つてゐるかも知れない）。

僕は保田の一言（伊東から聞いたので詩人の創作だつたかもしれない）に憤慨して、教師をやめて東京に出て来た。皆その勇ましさをほめてくれた。今は焼けた芳賀邸で、浪漫派の同人会があつたとき、僕も呼ばれてごちさうになつたが、同人になれとはいはれなかつた。僕の追憶の大概はこれだけである。

伊東 静雄と 日本浪漫派

小高根 二郎

日本浪漫派と云ふカテゴリーにどんな雑誌を該当さすかは、その人の勝手だが、私は昭和七年五月創刊の『コギト』、昭和九年十月創刊の『日本浪漫派』、昭和十三年七月創刊の『文芸文化』の三つだとしてゐる。

当初、伊東静雄はこれらの三誌ならびに編輯者たちに全く無縁であつたが、ふとした機縁からこの三誌にそれぞれ迎へられ、二十年以上も経つてみると、「中心に燃える」と云ふ彼の詩さながら、伊

生もコギト同人の誰も家に来て泊れと言つてくれなかつた」と云ふ。この見解は伊東に『コギト』をも心底でけ赦さぬ感情を抱かせたやうであつた。

その翌年の年末、伊東は西成区松原通から堺市北三国ヶ丘に引越した。近くに堺工業の教師をしてゐた栗山理一氏がゐて、彼との往来が頻繁になつた。栗山氏の学友の池田勉氏は今宮中学にゐて、その他清水文雄、蓮田善明氏等の諸秀才も東京にゐると知り、広島文理大系の国学への情熱は伊東に感銘を与へた。

昭和十五年三月二詩集『夏花』を文芸文化叢書として出したのも、その感銘の結果だつたのである。

「日本浪漫派」と僕

蔵原 伸 二郎

かつてあつた「日本浪漫派」は同人制ではなかつたように思う。当時僕は詩を六、七篇のせてもらつたが、これは保田与重郎君との個人的親交によるものだつた。保田君とは彼が大学生時代からの知友だ。その頃から保田君の著作全部が好きだつた訳ではない。その点彼も僕の作品について同じような態度だつたと思う。しかし僕は年少の彼を年ごとに尊敬している。だからといつて彼の思考と僕のそれと同じという訳合のものではない。僕は彼の思考し流動変幻する行文のかけにかくされた「詩」がすきなのだ。その純粹の庶民

派 的なげきのあらわれが好きなのだ。彼ほどかなしい生のかげやきを
たたえている文章を書く人はまれであると思う。にもかかわらず、
人々は彼の対面としての表れであるヒロイズムだけを、批評の対
象として、都合のいいようにつかっているものが多い。僕の知る
限りでは保田君の唯物論の勉強は大したものだが、それを知る人は
少ない。その上での発想なのだ。彼の独自の意見は。

さて、僕自身のことをいえば、僕がローマン主義だというのは一
部の他人がそういうので、自分で「俺はローマン主義だ」と宣言し
たことは一度もない。しかし、考へてみると僕の気質の中には、た
しかにそういう傾向があるのはみとめる。と同時に、つねにそれに
反発する傾向も多分にあるのだ。しいて僕にレットテルをはれば、僕
はリアリストだといいたい。ところが皆のいうリアリズムと僕のと
は、どうも定義が大分ちがうらしいので、みんなが仲間に入れてく
れないだけのことだ。でも、人が何といつても僕はリアリズムなん
だ。

僕が中央アジアが好きだったり、狐が好きだったり、日常の小事
が好きだったり、また理論物理学や天文学が好きだからといって、
何もリアリズムでないとはいえないだろう。ローマン主義だといっ
てもいいが、リアリズムだといつてもいいのだろう。また百年前の
リアリズムとロマンチズムが対立したからといって、今も犬猿のご
とく対立しなければならぬというのは、少しおかしくないかと思
う。なぜなら、僕の考へる進歩という概念は、昔の対立が、はたし
て正しいか、どうかということを改めて考へることだと思つてい
るからだ。また一つの詩のイメージの構成がロマネスクに出来てい
るから、その詩がローマン主義だともいえないし、ましてその作者

がローマン人だと断定するのもせつちかか、気短かな便宜主義では
ないかと思う。

要するに、敵である(らしい)ローマン派を攻撃否定することに
よつて、自分らの世界眼界を知らぬ間に狭くしたり、干からびさ
したりすることがなければ、幸いである。時と大衆は何時までも、
何かによつて圧迫されることを好まないことだけは確かだ。

「日本浪漫派」と私

淺野 晃

「バルカノン」が日本浪漫派特集を出されるといふのは意義ある
企てである。ついでには何か書けといふことで、清水文雄さんからの
お口ぞへもあり、この機会に回顧めいたことを書いておきたい。

考へてみると私は「日本浪漫派」とは何の交渉もなかった。これ
は自分でもおかしいほどである。年表を見ると、この雑誌は昭和十
年三月に創刊、十三年三月に終刊とある。してみると九三年つづい
たわけである。それなのに私は一度も寄稿したこともし、雑誌を見
た記憶さへない。誰がどんなものを書いてみたが、なにも思ひ出せ
ない。おそらく雑誌の寄贈をうけたこともなかったのであつたら
う。

そのころ私は何をしていたのか。まづ昭和十年といふと、私が
「麵麩」の同人に参加した年であつたと思ふ。この雑誌は旧友の北

川多彦君の主宰で、私は北川君にすすめられて参加し、刀田八九郎
といふ筆名でまづ三木清批判を三号にわたつて連載した。そのあと
詩や、評論を毎号欠かさず発表して、十三年頃まで及んだ。あと
では、本名を用ひるやうになつた。「青墓」といふ長詩をのせたり
(これは作品社から単行本として出た)、岡倉天心を紹介した「東
洋の理想と現実」をのせたりした。

昭和十一年に友人の門屋博が「新評論」を創刊し、これにも毎号
文化時評の筆を執つた。その最初の「日本的なもの」といふ論文を
小林秀雄君が取上げてくれて、それから「文学界」と交渉をもつや
うになつた。河上徹太郎君林房雄君亀井勝一郎君のやうな旧友があ
たからでもある。それで「文学界」にも書くやうになつた。

新日本文化の会ができたのは十二年のことであつたと思ふ。この
会で「新日本」を出すことになり、編集委員として佐藤春夫、萩原
朔太郎、倉田百三の諸先輩をはじめ、中河与一、中谷孝雄、藤田徳
太郎、林房雄、芳賀檀、保田与重郎の諸君と毎週一回顔を合せるや
うになつた。私が佐藤先生や萩原先生の知遇を得るやうになつたの
もこの時からだし、中谷君や林君と旧交をあたため、芳賀君や保田
君と相知つたのもこの時からである。中谷君は「日本浪漫派」の総
帥であつたし、保田君はその花形であつたから、ここで私は「日本
浪漫派」を知つた形になるが、事實は前記の如くであつた。ただ私
は保田君から「戴冠詩人の御一人者」を贈られて、ふかい感銘を得
たのである。爾来私は保田君の愛読者になり、「コギト」の愛読者
にもなつた。いづれにせよ「新日本」の時代(二年以上つづいた)

2 回顧・日本浪漫派
は、私にはいちばん楽しい時代であつた。私の「楠正成」も「新日
本」と「文芸日本」に発表したものの集成である。なほ「文芸日

本」は十四年に牧野吉晴君が創め、ここで尾崎士郎、大鹿卓、富沢
有為男の諸君と相知るを得た。

中河氏の「文芸世紀」が出たのはいつ頃からか記憶にないが、清水
さん達の「文芸文化」の寄贈をうけるやうになつたのも、この頃か
らであつたらうか。やがて芳賀君の「英雄の性格」が出て、これも
私に忘れられない感銘を与へた。私は十三年に「時代と運命」、
十四年に「悲劇と伝統」「岡倉天心論攷」を出した。この三冊に収
めてある文章が、それまでに発表した主なものである。天心の「東
洋の理想」の翻訳を出したのも十三年である。

そのうち私は、水野成夫君とアランを共訳したり、「アジア問題
講座」を編集したりして、生計を支へてゐた。十四年の末にモロア
の「英国史」を出し、これが大いに売れて、水野君も私も一息つけ
るやうになつた。そのころ彌山潤君や丹羽文雄君などの創めた「文
学者」の同人にもなつた。「ひむがし」を創めたのはそのあとであ
つたらう。結局「文芸日本」におちついて、今日に至つてゐる。師
と仰いでゐるのは佐藤春夫であり、相棒は中谷孝雄である。だから
私も浪漫派の仲間といふことにはならう。

日本浪漫派の意義と作品

アンケート

- ① 「日本浪漫派」の昭和文学史に果たした役割をどの様にお考へですか。
- ② 「日本浪漫派」同人の作品で感銘を受けたものがありますか。あれば作品名とその理由を。
- ③ 現在ならびに将来において「日本浪漫派」の精神を継ぐ文芸運動は意味のあることですか。

敬称略
到着順

- 田中克己 東洋大学教授・詩人(46才)
- ① 私はその近くにをりました(同人ではありません)。なので客観的には申せませんが
 - ② 伊藤佐喜雄「花の宴」
 - ③ これもお答へすれば曲解されることと思ひます。

杉浦明平

文芸評論家(45才)

- ① 反動的役割でした。日本文学の膿。それは自然主義や私小説に天皇制ファシズムとがまじわった癌でした。
- ② ありません。
- ③ この質問じしんがナンセンスでこっぴいではないでしょうか。日本そのものに目を向けることは「日本浪漫派」の精神をつがなくとも当然のことです。

文学があり、人間がある限り亡びませぬ。

榎方志功

板画家(56才)

- 保田与重郎が生命かけつこのこの大いなる国魂の拡大を更に更へと呼応相懸した度膽を敬します。
- ①、②、③の答ひも、この言葉に縊てを連々してゐます。

久保田正文

文芸評論家(45才)

- ① 否定的にかんがえます
- ② 太宰治の諸作品。
- ③ 意味のないことです。

前川佐美雄

歌人・日本歌人(55才)

- ① あの時期にはやはりあの運動は是非なくてはならぬもの、立派な役割を果たしたと思ひます。色々と今から言ふことは容易ですが、――

- ② 評論では保田与重郎のものがオーでした。作品では太宰治のもの、詩は伊東静雄田中克己、藤原伸二郎らのものが立派でした。

- ③ あのままでは具合悪いと思ひますが、あれを新しく時代に添ってくり返へし運動すべきです。このなり下つた時代には大切な意味があります。

山川京子

歌人・桃主宰(36才)

- ① 近代文学の墜落を救ひ日本文学に対する自信の喪失を恢弘したと思ひます。
- ② 「日本の橋」ほか保田与重郎先生の御著作。理由は①に同じ。
- ③ 絶対に必要です。

柔原武夫

評論家(55才)

当人、バキスタンへ出張のため、お答えできませんので御諒承下さいませ。

橋川文三

同時代同人(35才)

いずれも簡単にお答えしかねます。現在雑誌「同時代」で御質問の問題意識に沿ひ考察をつづけています。なお「文学」四月号の拙稿にも御答えにかわる論旨を含めたつ

もりです。
右 回答になりませんが、

今官一

作家(48才)

- ① 青年が青年の知恵と情熱をマキシムにはたらかせることが出来たら、ああいう運動は生れなかつたでしょう。大東亜共栄の理想が、侵略戦争にうつつたとき「浪漫派」の運動は、すでに役割をおわつたときでした。

② ○伊藤佐喜雄「花宴」

○亀井勝一郎「ゲエテ研究」

- ③ ①の答 青年が青年のために起す運動はいつの時代にも必要でしょう。

宮崎智憲

歌人

② 沢山であげつくせませんが

「日本の橋」 保田与重郎

「花宴」 伊藤佐喜雄 など

- ③ とびぬけてあたりらしく、又知りたいことにあふれていました。
- ③ 期待します。

久礼田房子(旧姓森)

歌人

- ① 日本文学に於ては伝統の精髓に迫り、そ

れを従順しやうとし、外国文学に対しても同様、皮相な受入れを排し、その思想、精神の精髓をたづねて、これを咀嚼しやうとした。

② 芳賀檀「古典の親衛隊」

浅野晃「東洋の理想」

保田与重郎「日本の橋」等々

- ③ もう一度日本浪漫派の精神に基いて、今、文学を考へ直してみる必要があると思ひます。この点大いに意義をみとめます。

小高根二郎

詩人・果樹園主宰(47才)

- ① 外国文学の吸収にばかり専念してゐた文学運動の中で、日本文学の伝統と取り組む決意をした唯一の文学運動。

③ 伊東静雄の『わがひとに与ふる哀歌』『夏花』の諸作。

③ 日本人の文学者であるかぎり、文学精神は日本浪漫派でなければならぬ。

近藤達夫

高校教官(37才)

- ① 昭和文学史における一つの偉大なる青春であった。文学の発想に於て、文学の帰する所において、確かに国民文学であった。「日本浪漫派」は文学者に情熱と責任とを

正しく示したと思う。思えば、何か異常な、狂ほしい程に燃え立った一時期であったと思う。

② 保田与重郎「日本の橋」「機織る少女」その他多数

③ 「日本浪漫派」は亡びるものではない。それは日本の伝統を承継いだ美と正論であるからだ。そこには貴族的なものも庶民的なものも、共に生かし得る如き精神の大きさがあつた。而して国の運命を生命とする強靱な精神の清浄さがあつた。現在並びに将来において「日本浪漫派」の精神を承継ぐ文芸運動は強く展開されねばならぬと感ず。もうその時は来ている。

中村地平

作家(50才)

① ドイツ浪漫派的な抽象的で混沌の世界を日本文学に持ち込んだ意味は小さくないと思います。又、風土的な民族主義的な考え方も僕は賛成でしたが、それが当時の軍国主義的なものにくらか結びついた感じがあるのを遺憾と思っていました。

② 題名はおぼえていませんが、亀井、保田氏の評論・太宰、中谷(孝雄)その他の諸氏の諸作。

③ うけつぐ人の精神と作品次才でしょう。

高杉一郎

(49才)

① a 明治以後の自然主義文学的思考に鋭い批判をもちたこと。

b 政治的ナショナリズムとむすびついて反動的役割をはたしたこと。

② a 保田与重郎 明治の精神にか

b 伊藤佐喜雄 花の宴

③ ①のaとbをもし切りはなして継承することができれば、意味があるでしょう。

林富士馬

詩人・評論家

① 「同時代」という黒の会から発行の雑誌に、橋川文三氏が「日本浪漫派批判序説」というのを連載され、その結論は勿論否定

的であつたが、大体論文は、その結論の結果より、そこに行く道筋のところが意味があるのであつて、私はこの橋川氏の業績を大いに注目していた。それは在来の「日本浪漫派」の批判が餘りにも、チャナリスチックで、又餘りにも概念的であつたのに、平素から不満を抱いていたからである。その後、その橋川氏のこの論文が、大方の注目を浴び、反響を得たことを知ったが、そ

れは当然なことだと考えている。私は、今迄、大方の通俗な文学史や、活字本で説明してある「日本浪漫派」批判に不満を持っていたが、橋川氏の結論とも逆のような考えを持って来ている。

併し、それを一言で云うことは残念ながら出来ない。一言で判定する便利なことばを、この場合知らない。

② 嘗て、三島由紀夫氏が、「日本浪漫派」の文学運動の文学的成果の案外妙い——というより、絶無なことをしるしていたが、成程、小説というところ、すぐに思ひ出せざるものが私にはない。太宰治氏の小説作品や、檀一雄氏の初期小説作品を、「日本浪漫派」と結びつけていゝのではないか。

又、別に、私は、緒方隆士氏の作品を思ひ出す。何とかかんと云つても、昭和中期の小説作家で、後々まで残つて批判の対象になるのは、太宰治しかないのではないかと併し、「日本浪漫派」の文学運動を、小説作品を中心にして考察すると、さういうことになるが、私は、直接に、その運動に結びつくことが残念ならなかつたが、併し、殆んど、その影響のなかに育つて来たので、その感銘は又特殊なものであつて、

詩、評論、翻訳、と各分野に涉つて、根本的な文学的感銘と影響とを得た。私は、ゲオルゲ一派に対するカロツサの立場を、その当時、ひそかに自分になぞらえていた

まく処理することが出来ず、答案を書くのもイヤですが、この際、奇妙に、私には面白い問題だったので、一寸おしゃべりがしてみたかったです。

③ 自然主義風な世界観、社会観にあきたらない私には、純然たる文学技法の問題として、当時、マルキシズムの文学運動か、日本浪漫派、しかなかつたのである。

村松正俊 東洋大学教授・独文学者(63才)

その後、「日本浪漫派」の文学運動に就

① 大変重要なものと考えます。

て、意見の合う人々は、気持のよい勇気を

② 保田氏 亀井氏などの諸論文、

持つているかと思うと、大抵、その文学的

③ 意味があると考えます。

才能で私には徹底的に不満であつたし、そ

大井広介 評論家

の文学的才能で私を鼓舞し、よろこばして

① 文学しづらくなつた事態への一種の負け

くれる人々は、大抵、餘りにも文壇的、餘

惜しみ、強がり。

りにも發智であつた。

② 太宰治

私は餘りにも、「日本浪漫派」を、ひと

③ 「人民文庫」より却つて人を世に送つた。

つの奇異な結晶として愛着するが故に、

将来性はあるとおぼえず。

もう二度と、「日本浪漫派」ということば

竹内 好 評論家

を聞きたくない。

①②③とも簡単にお答えできません。橋川文

真の道統というものは、さういうのれん

三氏の分析に興味をもつて見守っております。

みたいなものをかつぎ、売り物とし、商売

齋藤清衛 東京都立大教授・国文学者(65才)

に精出すことと、又別なことのような気が

① 自然主義に陥らうとした弊を認め、文学

している。

② 佐藤「お絹とその兄弟」——新聞に載つた

以上、アンケートの返事にはなりません。

中編物として、興味多くよんだ記憶を持つ

私は知名人でないので、アンケート類を、う

成田三吉郎 (33才)

り方を近代の文学の中で自覚させようとし

③ 世界人類愛を理想とする文芸運動。

隨想
長恨歌
河野辰三

千古の絶唱として、古くから多くの人々に愛誦され、国文学にも多大の影響を与えた白楽天の「長恨歌」の題名は、結末の、「天長地久、時有りてか尽くるも、此の恨、綿々として絶ゆる期無からん」に基いているものであるが、最近、「此の恨」の解釈について大学や高校の漢文の先生方の中で、いろいろ意見があるので、私の卑見を記して見た。

京大教授吉川幸次郎博士が、岩波新書新唐詩選続篇で、

なぜ詩人は、二人の恋を、「此の恨」と、悔恨、遺憾を意味する字で、表現するのであろうか。題名を「長恨歌」というのも、ここから来るにちがいないが、私は詩の最後に至って、たいへんわかりにくいものに逢着した感じである。現世では幸福であり不幸であった二人、そうしてあの世でも、またあの世でもと、ちかちか二人は、そのちかちかを突現して、再び、三たび、どこかの世界に、夫婦として生まれかわっているにちがいない。しかし恋愛のあるところには、必ず幸福があると共に、不幸もまたしの

びよる。馬嵬の悲劇の生むような恨みは、綿々として、未来永劫にくりかえされるであろうか。それともまた二人の恋人の魂は、その誓いのごとくには、容易にめぐりあえず、どこか別々の世界に、さまよっているゆえに、此の恨みは綿々として尽きる期は無いのであろうか。餘韻は嬌々として、長い詩の結末にふさわしいことを知るのみである。

といて疑いを残してあられるので、群馬県立前橋商業高校の原田種成先生は、中国には、古くから、民族の信仰的思想として、非命の死を遂げたものの魂魄は、永久に帰するところがないという考え方があったに違いないという前提の下に、

吉川博士の後説のように、二人の恋人の魂は、その誓いのごとくには、容易にめぐりあえず、どこか別々の世界にさまよっていると解したい。ただ、なぜめぐり合えないのかという「此の恨み」の意味するところは、非命の死を遂げるに到ったため、恋人同志の固い比翼連理の誓いも無駄になって、あの世において再会

するすべを失ってしまい、その結果、思い焦れながらも「魂魄来つて夢にだも入らず」と、夢の中にも霊が尋ねられ来れないことになってしまったのである。このように、非命の死に終ったために、相照相愛の恋人の誓いも無くなって永久に会うことができない恨みを「此の恨み」と言つたとすれば、結末の意味がはつきりするのではなからうか。(漢文教室才二十三号)

これに対し、東京教育大学の鈴木修次先生は、「此の恨」の恨を遺恨・悔恨・怨恨などという意味に解しないで、もっと情緒的に理解すべきであるとなし、幾多の用例を引いて、恨を異性に対する思慕愛著の感情、男女間の不足不満の情緒と解し、

「長恨歌」の「此の恨」の「此」は、叙述形式の上では、その前にある「天に在りては、願わくは比翼の鳥となり、地に在りては、願わくは連理の枝とならん」をさす形をとっているが、実は「此」には、上述してきたロマンスのすべてを総括したい気持が漠然と働いていたものであつたであらうこと。「恨」は、男女間情緒の恋愛(恋愛の特性である満たされない感情)そのものをさしたものであつたろうこと。「此の恨」ということばは、「男女間の

情愛の情緒」は、あるいはまたもつとおおまかにいうならば「恋」というものは」とまでいいかえても大差のない感懐のことばであつたであらうこと。以上の三点が、「長恨歌」の「此の恨」について、わたくしの考えている大要である。(漢文教室才三十四号)と述べておられる。

さて、以上の三先生の所見を、もし白楽天が読んだならば、彼は何と云うであらうか。長恨歌の意義をよく理解して下さつて満足です。有難うございますと言うであらうか。これら三先生の説は、何れも長恨歌の表面の解釈であつて、文字の表面に現れていない作者の気持、即ち長恨歌を作つた真意や動機というものを、少しも念頭においておられない。私は「此の恨」二百三十句に及ぶ長篇の詩の最後の結びの言葉であるから、作者の思い、念願が、こゝに打込まれていると思う。だから、「此の恨」は、単に客観的な恨ではなく、作者自身の恨もまた含まれていると解釈すべきである。表面的には、玄宗と楊貴妃の恋愛が悲劇に了つたための当事者の恨、それは、金色夜叉や不如婦の当事者達の恨と同じものであるが、裏面には、作者白楽天の此の恋愛事件に対する無限の恨が含まれていると見るべきである。

旅館

大根屋

宮島町
TEL
(宮島)
1 3 番

楽天が長恨歌を作った動機と真意は、友人陳鴻の書いた長恨歌伝に明らかである。即ち

元和元年冬十二月、太原(地名)の白樂天、校書郎(官名)より禁屋(地名)に尉(官名)たり、鴻、瑯琊(地名)の王質夫と是の邑(禁屋のこと)に家す。暇日、相携えて仙遊寺に遊ぶ。話、此の事(玄宗と楊貴妃の情事)に及び、相与に感歎す。質夫、酒を樂天の前に挙げて曰く、夫れ希代の事は、出世之才に遭い、之を潤色するに非ずんば、時とともに消没し、世に聞えざらん。樂天は、詩に深く、情に多き者なり。試みに為に之を歌わば如何と。樂天、因りて長恨歌をつくる。意うに、ただ其の事に感ずるのみならず、また尤物を懲らし、乱階を窒ぎ、將來に垂れんと欲するなり。

樂天は三十二才の春、拔萃科の試験に及ぶして、秘書省校書部の官を授けられたが、三十五才元和元年四月、更に制誦の試験に依じ才四位で及ぶ、秋、禁屋の尉に任ぜられ、十二月に任地に赴任したのであった。行政官として初の任官であり、且つ憲宗皇帝即位の翌年でもあり、新天子治政の初期に当り、彼自身大いに善政を布かんと抱負に燃えていたことは、想像に難くない。されば赴任後間もなく、その土地に住居していた陳鴻・王質夫等と、相携えて仙遊寺に遊んだ時、三人の談話が、期せずして、玄宗と楊貴妃の事に及んだのもまた当然である。而して治世の前半は名君と称せられた玄宗が、その後半は、一婦人の色香に溺れ、政をおこたり、遂に国家の大乱を招き、人民を塗炭の苦しみ陥れたことは、実に希代のことであり、後世の天子のよき戒めであるから、この情事を潤色して歌い易い詩となし、世々の人々の口に歌わせ、大いに流行させ、永

久に天子始め爲政家の反省の資料たらしめようとしたのである。樂天の天才の手腕で、優婉佳麗の文章を以て潤色し、表面如何にも玄宗に同情を表しているように見せかけているのは、唐の天子の御世である以上、当然のことである。然し唐宋詩評に言つてあるように、そしるべきところは、むしろ大膽な筆致を以てそしっているのである。

冒頭の、「漢皇、色を重んじて、傾国を思ふ」この一句、何たる大膽な諷刺であろう。この一句に表現された思想が、長恨歌全篇を貫く根本精神である。重んずべきは、民生であるべきに、女色を重んずとは何事ぞ。思ふべきは、国家興隆の原動力となる賢哲の士であるべきに、国家を傾覆する美女を思ふとは何事ぞとの、精神氣魄を以て起筆したが、二百三十句に及ぶ一大叙事詩長恨歌である。されば、篇中に於いても、「芙蓉帳、暖かにて春宵を度る、春宵短かきに苦しみ、日高くして起き、これより君王早く朝せず」と言っているのは、明白に、貴妃との悦楽のために、玄宗が政を怠るようになったことをそしつたものであり、「姉妹弟兄、皆、土を列ね(諸侯に封ぜられること)、憐むべし(羨むべし)、光彩、門戸に生ずるを。遂に天下の父母の心をして、男を生むを重んぜず、女を生むを重んぜしむ」とは、楊貴妃一人のおかげで、三人の姉妹が大名の夫人の待遇を受け、従兄の釗は、名を国忠と賜い、宰相に任ぜられ、従兄の銜は殿中少監に、もう一人の従兄の錡は騎馬都尉にそれぞれ要職に重用され、一門尽く榮達したので、天下の人民をして羨望のあまり、男子を生むより女子を生んだ方がよいと長嘆息せしめたことを歌つたものであり、極端な情実人事の行われたことをそしつたものでなくして何であろう。又、「驪宮高き処、青雲に入

り、仙樂、風に飄つて処々に聞ゆ」と言い、青雲に聳る程の高処驪山宮で、仙樂(霓裳羽衣の曲)を奏し、貴妃と共に日夜遊宴に耽つていた、その音楽の音が、風のまにまに処々方々に聞えるので人民達は、あゝ今日もまた皇帝はお楽しみか、ああ今夜もまた樂の音が聞える、我々は食うや食わずにおおのにと、顔をしがめたことであろうとの意を、言外にほめかしている。かくて一緩歌慢舞、絲竹を凝らし、尽日君王看れども足らず、漁陽の鞞、地を動かして来り、驚破す、霓裳羽衣の曲」と言つて、玄宗が、日夜、宴樂に耽つたために、遂に安祿山が叛乱を起したことを、実に克明に詩に歌っているのである。これをしもそしりの詩に非ずと誰か言わん。白樂天は、長恨歌を作つてから二年後、元和三年に左拾遺という諫官に任ぜられてより、特に濟世救民の志を以て、いわゆる諷諭詩なるものを盛んに作り、民衆の困苦貧窮の状態を描写しては、朝廷や官僚の豪奢横暴を諷刺した。樂天は、孔子の刪定した詩経から杜甫に至るまでの中国詩歌のすぐれた伝統を、新樂府を中心とする諷諭詩的なものによつて継こうとして、決して詩文のために詩文を作らず、すべて、君のため、臣のため、民のため、物のため、事のために作ることを目的とした。それがために、首句(詩のはじめ)にその目を標し、卒章(詩のおわり)にその志を謂つたという形式をとつた。この趣旨、この形式で、その当時の社会的現実内容を暴露して、あるいは諷刺し、あるいは攻撃し、あるいは諷諭し、あるいは

は諷諭し、もつて時弊を救い、人病を治けて、国家社会とくに人民の福利をひたすら念願した。これが、社会詩人、平民詩人としての白樂天の文学精神であつた。かように見えてくると、長恨歌は、樂天自身は、当時お唐の御世であつたから、天子を憚つて、諷諭詩の部類に入れては行かないが、その内容形式から言えば、美事を諷諭詩であり、その首句に於いて「漢皇色を重んじて傾国を思ふ」と言つてその目を標し、結尾に於いて、「此の恨、綿々として絶ゆる期無からん」と言つて、作者の無限の遺憾の意を表明して、以て、無窮に世の支配者の溺色を諷めたのである。私は、広島の原爆慰靈碑の前に立つ毎に、長恨歌の結句、「天長地久、時有りてか尽くるも、此の恨、綿々として絶ゆる期無からん」が口ずさまれてならないのである。あゝ、「此の恨」ある者はアメリカを恨むであろう、ある者はトルーマンを恨むであろう、ある者は東条を恨むであろう、ある者は戦争を恨むであろう、然しながら、この人類の蒙つた史上最大の惨禍に対して、誰か無限の痛恨の情を起さないものがあろうか。そこで、私は、たつた三字でよいかから、この慰靈碑の側に、大自然石に、雄渾なる大文字で「噫、長恨」と刻んだ一大弔魂碑を建てたら如何なものであろうかと思ふ次第である。(三十三、六、二十八)

廣島驛辨当株式会社

廣島市松原町
TEL ④ 5 3 9 5

梅棹忠夫氏は 東南アジアを かく見て来た

梅棹 忠 夫

大阪市立大学助教授
東南アジア移動調査隊長

小林 建 三

中国新聞論説委員

酒 井 行 雄

広島大学助教授

火の会

六百田 幸夫

高橋 貞次郎

竹川 哲生

隠岐 国彦

笹本 毅

梅棹理論とバルカノン

笹本 本日はお疲れのところをぶしつけな私共の御願ひに御快諾頂きまして、本当に有難うございました。では只今から座談会をはじめたいと存じます。

竹川 大正生れの作家達が戦中派といふことを言ひ出して、もう数年あるひはそれ以上になると思ひます。その表現が皆んなにピツタリくるかどうかは別として、いふならば僕らもその戦中派に属するわけですね。そして戦前派と戦後派にない、何か我々にまつわつてある。ぼくらはそれを戦後十年は半ば意識してゐた訳ですが、こゝ三、四年来それが相当ハッキリしてきたと思ふんです。そこでさういったものの中から問題になるものを探し出し、できればそれを解決し、更に何かを打ち立てたい、又打ち立てなければならぬ。といった風な気持を抱くやうになつたわけですね。

それで梅棹先生の「文明の生態史観序説」を読みました時、これは談せると思つたんです。特に日本の近代化を云々し、「日本には日本の課題があつたし今後もある」んだ、といつてをられるあたり。それを戦中派が言つ

「バルカノン」前号では、「アジアの精神の流れのなかで」の三篇のエッセイで、梅棹忠夫氏の「文明の生態史観序説」と笹本毅「東は東（バルカノン前々号）を対応させながら、私たちの文明観を啓いた。さうした矢先に、突然、梅棹氏が来広された。青葉薫る広島の夜、梅棹氏を囲んで数刻の懇談の機会をもつことができたのは幸ひだった。

梅棹氏は東南アジア移動調査隊長としてタイ、カンボジャ、ラオス、南ベトナムを廻つて帰国されたばかりだったので、それら現地のもつとも新しい姿と生々しい動きをお聞きできたし、又同世代のおもひを交流できた。まことに奇しき邂逅だった。以下はその要旨である。

たといふことですね。思はず共感を覚えまして。是非一度お会いしていろいろ談し合つてみたいと思つてゐたんですよ。

小林 さうだな。明治維新の志士はあらゆる世界の学問をしてゐる。そこにあの明治の偉大があるわけですね。その点バルカノンの人達は梅棹さんに教へられるところが非常に多いと思ふんです。

梅棹 いやー。しかしなんですな。研究室に行つたら「バルカノン」という雑誌があるんでせう。しかも呉からですな。なんでこんな本私んところへ送つてきたんかなアと思ひましたよ。それがあけて読んでみて驚きましたな。大した事がかいてある（笑声）これはたいへんなことになつた（笑声）と思ひましたな。私も戦中派の意識を持つてゐます。その意味でバルカノンを讀んだ時に同世代のシンパシイを感じましたね。

竹川 あゝさうですか。先号のバルカノンでは先生のことをいろいろと上げて評論してゐるわけですが、僕らはなにもシンポジウムといった様な意識はなかつたんです。それかオ三者や先生の目にどのやうに映つたかや問題になるんですね。それといふものが党の大先輩小林先生から大いにアフレされました

ね。生還か自爆かなど……しかしぼくらはシヤモの喧嘩のつもりは毛頭ないんですよ。

小林 アッハッハ……たゞなあ。米とパンに分けるところに問題があるんだよ。「米とパン」ではもう古いと思ふね。学問にもいろいろあるが少し植物学でもやりなさいよ。

笹本 簡単に分けますからな。梅棹 「米とパン」と云ふことだけではわり切れないものがあると思ひますね。

竹川 まあ、先生の考へ方の骨組の一つには生態学理論と云ふか、それから発展するサクセツション理論といつたやうなものが、あるわけですが、それを従来ぼくらは系譜として言つてきたんですね。全然異質なものではないんですが、抵抗を感じましたなア。

小林 広大の堀川教授は植物の分布状態によつて世界をわけてゐる。さういふ生態学的な学問といふものは非常に大切だ。

梅棹 あの先生は大した先生です。

隠岐 このたび東南アジアから堀川先生にお土産として持ちかへられたジャンゲルのなかの苔類を研究される訳でせうが、昔南方熊楠翁も苔の研究をやつておられたようですね。

梅棹 あの方の粘着ですネ。天皇のなさつ

てゐる研究と同じものです。

高橋 晩餐会の時普通ならこんな所に来ずに顕微鏡でものぞいてあるところだがとおつしやつておましたね。

梅棹 本当に立派ですね。

芳賀檀・日本浪漫派再建

竹川 此の次のバルカノン夏季号は此の間岩波の「文学」に日本浪漫派をとりあげておましたが、その日本浪漫派の回顧と展望でも言ひますか、相対的な取りあげかたでなく素直にふりかへる意味で特集しようと思つてゐるんですが、梅棹先生は日本浪漫派の影響を受けられましたか。

梅棹 え、影響は受けてると思ひます。三高の先生に芳賀檀氏がおられて、あの先生のものも讀みました。

隠岐 「古典の親衛隊」などですか。

梅棹 さうですね。今芳賀さんはどうしてゐられるのか。随分会つてゐません。

隠岐 五味康祐などと日本浪漫派再建をやつたり、新潮たつたかで十返肇と日本浪漫派再建で論争したり、一昨年ごろには私費で国際ペン大会に日本代表として出席したり、仲々

活潑です。

竹川 日本浪漫派の再建と言ひますが、これは芳賀檀に主宰誌を持たして上げたい、又芳賀檀ぐらゐになると過去の経歴からいつても雑誌の一つくらい主宰してもいい、といった気分が集つた連中であつた様ですね。その大分前に日本浪漫派の中核ともいふべき例の「コギト」の再刊が企画されたことがあつたやうです。その時には井上靖や庄野潤三らも参会したらしいですが、集つた多くの人達が世に出たいといふ気分の方が強くて、つひに纏らなかつたんですな。

それから後京都の祖国社から伊東靜雄の追悼号を出したのが動機となつて、日本浪漫派の再建といふかけ声があつたらしいですな。

ところがいざ集つてみると、何をどのやうに話したらいいかとそれ／＼迷つてゐるといつた風な時があつたさうですよ（笑声）

梅棹 あゝなるほど、さういつた気分はわかりますよ。どう話したらいいのかわかぬ（笑声）竹川 その後十返藍なんか随分叩かれじまひで不体裁なことになりましたがね、尤もこれは白井吉見のさしがねだといふ説もありますがね。ところで先生が蒙疆に居られたのはいつごろですか。そして終戦をどこで迎へら

れたわけですか。

私の本質はウエットなんです

梅棹 戦争中です。終戦の時には張家口にゐました。西北研究所にゐましたからね。これは善隣高商が経営してゐました。

隠岐 私 学生時代の志として回教徒として張家口からトルキスタンに出て、タクラマカン砂漠、葱嶺を越へてアフガニスタンに抜けて、アラビヤのメッカまで歩いて行く積りでゐました。トルキスタンへの連絡は、当時新疆省の回民の独立運動を策し、敗れて日本に亡命してゐた東干族のムフイテイ將軍が東京に居りましたので、深い連繋のもとに踏査する積りでした。それが開戦で急に南方に行く様になりジャワに赴き、つひに志を得ないまゝになりました。

梅棹 エ、西北研究所からも西北班の若い人が大分入つてゆきました。トルコ語の研究です。

隠岐 新疆省方面は東トルコ語ですネ。あれは西トルコ語に較べると発音など大分雄渾ですネ。
梅棹 そうですネ

隠岐 それでその方達は、なんですネ、羊毛とか鴉片密輸入のキヤラバンに混つて入られた訳ですか。

梅棹 キヤラバンにもぐつて入つてゐました。戦争が終つてインドを経由して帰つて来たのが居りますよ。

隠岐 そうですネ。二十二、三年頃でしたか新聞で大きく取あげてゐたことがあります。善隣高商ですが、これはアジア研究の熱心な学校でしたが、東京では蒙古研究所や回教團研究所を設けてゐましたが。

梅棹 蒙古研究所は蒙疆政府がやつてゐました。回教團研究所はありませんでしたが、回教工作として回民女学堂など経営してゐました。

竹川 蒙疆といへば保田与重郎の蒙疆と言ふ本があつたですネ。戦争中読んだことがあるが、今想ひ出さうとしても何を書いてあつたんかサツパリ覚えてませんよ。たゞ読んだといふことだけハツキリ覚えてますが先生お読みになりましたか。

梅棹 読みました。しかし私も全然覚えてゐないんですよ。（笑声）私は大学院の頃、蒙疆の西北研究所にゐた訳ですが、今から考へて見るとあの頃受けた痛烈な体験印象が私の

一生を支配したと考へられますね。

酒井 私は当時先生と一語でしたが先生はずすんで現地人の中に入り、一語にねたりして彼等の生活の中に入つて行かれてゐましたね。

梅棹 私は本質的にはウエットなんです。現地人と接するとき非常にウエットなんです。しかし現実を見る態度はドライなんです。人によるとアジアについて言つたり書いたりしたものは大変ウエットな態度であつても、現地人に接するときは、あの人がと驚く程ドライな人がありますネ。こんな人など本心はアジアを愛してゐるのかどうか判りませんネ

東南アジアから歸つて感じた日本

笹本 どうですか先生 東南アから日本に帰つてこられた時何を一番つよくお感じになりましたか。

梅棹 そうですね。一番つよく感じたのは日本の女の人はキレイだなと云ふことですね。オニに色が白い。そしてポチャポチャとしてるでせう。指先でかうやつてつゝゝゝ見て見たい様でした。オニに町が薄汚れてゐるといふこ

とですね。東南アでは景色はスカット澄んでゐますよ。これは煤煙が多いといふことですよ。つまり日本は工業国だといふこと、それから鉄粉が多いと云ふことですね。これは国鉄のせいだ。つまり交通網が日本は発達してゐると云ふことです。この二つの点を一番強く感じましたね。それから帰つて来て、留守中何か交つたことはないかと言ふと「人間の条件」が百万部も売れてると言ふことでした（笑声）まだ読んでゐませんがネ（笑声）

笹本 岸内閣は以前から東南アの開発と言ふことを言つてゐるのですが、この政府の気持は現地の政府なり一般庶民に通じてゐるのでせうか。

梅棹 エ、それは分つてくれてゐますよ。ラオスなんか一億余りの金を貰へるといふので喜んでゐますよ。たゞで貰へるんですからね（笑声）ドイツでもフランスでも英国でも現地の技術指導といふことはずとやつてゐることです。政府の東南ア開発に反対する人も一部にありますが、どこの国でもやつてゐることをやらないといふ法はありませんね。小林 うん、こういふところから啓蒙する必要があるな。

竹川 五味川の「人間の条件」を読んでおも

しろさの他に心を打たれるものを感じました。まあ、あの主人公がやつて学生時代左翼で検挙されたといふことを常に読者に先入観として植ゑつけてゐる点が鼻について、そこらが一寸私共と違ひますが、主人公の抱く苦悶、現地人に対するジレンマ、これは本當に私共に痛切に感じられますね。

梅棹 私はまあ、昭和十一年高等学校に入りましたがその当時はまだ左翼運動はさかんでしたからさういつた気分も知つてますから、理解できると思ひます。

竹川 「人間の条件」は「挽歌」なんぞとは大きな違ひですね。

梅棹 大変からむ様ですがね（笑声）「挽歌」は大変な意味を持つた作品ですよ。あれは日本では伝統のない北海道を舞台にしてゐる。そして人物も移民の三世だ。大体明治以来日本文学の課題は家族制度と近代自我の争起だつた。ところが「挽歌」ではその問題は解消してゐる。つまり日本人の若い世代にはその問題を卒業した、そんな問題が全然感じられない新しい世代が登場してきたといふことです。これは批評家の言つてないことですが、大きな問題だと思つてゐます。

竹川 さうですか。僕はこれはジャナーナリス

ムの宣伝力にのつてあそこまで来たものであり、反モラルな放埒感情が俗受けしたものだと思つてゐたのですが……例へば幸田文の「流れる」や「おとうと」にしてもあゝ言ふ「挽歌」とは対照的なものを支持する読者が多数あると言ふことですね。

梅棹 ジャーナリズムはいつも機会をねらつてゐます。ジャーナリズムにつかまれたといふことはその様な条件がそろつてゐたといふことですね。

六百田 先生しかし「太陽の季節」や「挽歌」が後日迄残るものでせうか。例へば鷗外や漱石の作品は現代迄残つてゐますが「太陽の季節」や「挽歌」は残らないと思ふのです。

竹川 「太陽の季節」と「挽歌」はちがふよ梅棹 「太陽の季節」と「挽歌」は違ひますね。「太陽の季節」はつまらんですが、「挽歌」には先に言つた様な意味があります。日本の現代生活は非常に複雑でいろんな層をなしてゐる。例へば四つの重層があるといふか、その一つの層にうかつただけで二十万位の読者をもちますからね。明治といふ時代は非常に安定した時代であつたならばこゝろに外、漱石の文学も生れ、今に残つてゐますが後に残るか残らないかといふ点からは、大胆な断定ですが、後に残る様な文学はもうこれからは出ないんじゃないですか。明治時代で

は例へば自然主義文学など二十年三十年も長々とつゞいてゐますが、こうスピーディーにうつる現代の社会では明治、大正の文学とは質が違つてきてゐますからね。

東南アジアと華僑

高橋 商業はもつと科学的にし、ければならぬといふお話がありましたね。

梅棹 さうですね。出先商社の駐在員は個人としては非常によくやつてゐます。この点外務省の出先公館の人達も同様で、内地で想像してゐたよりもずっと奮闘してゐます。だが商社の人は例へば語学が外国商社の人に較べて出来ぬ。その爲に日本人ばかり集まる様になつて狭いそのグループの中で情報を交換しあつてゐる。そんなことでは大きな商売は出来ぬ。これを解決するには各商社が出資して語学の学校をつくれれば良い。そこで語学をみっちりやらせて商売をやらせる。そうすればどん／＼大きな商売が出来る。ところが日本商社の人もそんなことは分つてゐる。分つてゐてもやらない。つまり競争相手を外国の商社におかずに日本の商社においてゐるからです。ある欠点があれば必ずそれを克服する方法がある。それを克服する方法があればそれを行ふ。こんな分りきつたことを

日本人はやらぬ。それで商売は結局カンだとか言つて改め様としない。これでは昔の大福帳式だ、つまり商業がサイエンステイックに行はれてゐないので。だから私は商人が困を飛つてゐると思ふ。この工業力をもつた国で、この勤勉な国民がゐる、今の様な低い生活程度ではなさけないと思ふ。もつと科学的に商業をやれば、国民所得は増へる筈なんです。

六百田 東西アの華僑は国府系ですか、中共系ですか。

梅棹 これは国府系が圧倒的ですね。中共系もあつて表面にあらはれると危い程国府系の勢力が強いですね。南方華僑があれほど商業を一手に握つたのは東南アには封建制度がなかつたからブルジョアが生れなかつた。その爲に近代化にならぬ手がある。その空白に華僑がスパツと入つて来て商業を一手に握つた訳です。そして華僑は吸ひ上げた金を工業資本に廻さないので、ところが日本なその場合はちゃんと封建制度を経てゐるからブルジョアが生まれてゐる。近代化にならぬ手となつた。日本の貿易はそれらブルジョアの手で伸びてゐたのです。その点ブルジョアのゐない東南アの国々が將來どうなるのかといふことはむづかしい問題ですが、あえて言ひますと私の感じでは共産化してゆくで

せうね。近代化をやつてゆく爲には共産主義を国家態勢に持ちこまざるを得ないでせう。隠岐 「指導された民主主義」ですか。先生の今おつしやつた形を一番露呈して苦しんでゐるのがインドネシアでせう。

東南アジアと日本

梅棹 アジアはひとつといふ言葉があります。これはある場面についてだけ言へる。例へばオ一回のバンドン会議で反西欧と言ふ点ではまとまりました。しかし個々の国々で国情が違ふのでオ一回は失敗してゐます。例へば印度を反英のやうに言ふ人がゐるが、反英は極く一部の指導者階級で、殆んどは親英です。それにビルマとタイが仲が悪いといふ風にそれ／＼ちがつてゐます。対日感情は東南アは大体全体的に良いのですが、商売上にまで有利になる様なものではない。その点突にハツキリしてゐます。アジアの連帯性を言ふのは良いがこの様な現実を知つて尙且つ言ふものではないと思ひますね。その点ではハツキリドライでなくてはゆかぬ。實際に外地へ出て、外国人と接触することは大切なことですね。バルカノンの方々に希望したいのは、どし／＼外国に行つて貰いたいことですね。外へ出る機会がなかつたら、広島へ

来る外国人をつかまへていろ／＼つきあつてみる事です。さうすれば良い面も嫌な面もよく分る。例へば現地で聞いたところですが、タイは大東亜首相会議に言を左右にして参加しなかつた。それは既に日本の敗北を感じてゐたからです。その代りワラワン殿下をよくした。日本人は殿下といふと喜ぶことをよく知つてゐるのです。ところがバンコックでは石を投げると犬か殿下にあたると言はれる位で、自転車に人をのせるようになつた一輪タクと言ふのです。あれの車夫にまで殿下がある(笑声)だから日本が敗北すると実は英

梅棹 たしか難解ですな。
小林 つまり独善なんだよ。
梅棹 私の感じではそこ迄は思ひませんが、つと分り易い方がいゝでせうね。
竹川 僕らも分り易い様に努力してゐるんですが……

日本の工業と東南アジア開発

梅棹 一体日本人が文化の上で絶対にこれだけは守らなければならぬといふものがありますか。私はそれを工業だと思ふ。工業さへしつかりやつてれば国民は食べてゆけるんです。東南アにも日本の工業力で結んでいつたらいゝと思ふ。侵略的でない方法でお互ひの話し合ひの中から、両方が生きてゆける道がひらかれていくと思ひます。その意味でアジアの連帯性はあります。アジアと言つても人種的には東南アまでで印度は西欧系です。つまりこちらがニッコリ笑へば東南アの人は笑ひ返してくれといふ事です。このあたりまでは蒙古系のようにですね。

笹本 農業ではアジアの連帯性は考へられませんが。
梅棹 日本の農民の生活程度はものすこく高いのです。だから日本の農民がこちらに入つても生活程度、農作方法が全然違ふんですか

らやりようはありません。

現在の日本の農業は工業を基礎に置いたもので工業がなければ成立しないのです。その日本の農法を印度で試験的にやったら一挙に六倍の収穫があったのです。ところがそれを印度全域でやらうと思へば、まづ電力が要る、化学肥料を作る工場が要るのです。電源開発を考へてみますが、建設は外国でやつても、それを維持管理する者から養成しなければならぬ。タイなどでもさうです。今は火力発電やつてみますが、電気が使へるのはパンコック位です。メコン河やメナム河の開発を外国資本が入って調査してゐますが期待する程のものではない様です。工業の発達を計画しても、先程も申しました様に、工業の発達を推進する資本をもったブルジョワがゐないのです。それでアジアで工業の一番発達した日本としては、工業は私達が分担してやり

ますから、あなた達は農業をしっかりとやらせて下さい、と言つた様に分担してゆかねばならぬでせう。日本としてはまあ、農業の技術指導が出来くるくらいのものでせう。大体ブラジルの移民なんかも私は反対ですね。ブラジルの農民の生活程度より日本の農民はずっと程度が高いので可愛想です。明治以来の惰性の

やうなものです。百姓をほかしに行つてゐるんですな。移民団体あたりが農民を売つてゐるとも言へますね。つまり日本の農業には異質の工業が結びついて来てる。肥料一つと上げてさうでせう。つまり農業人口をへらして工業人口を増やしていくこと。これが日本人の生きてゆく道だと思ふ。

小林 いよいよバルカノンに原子爆弾が落ちたな(笑聲)
梅棹 だがこの原子爆弾には放射能はありません(笑聲)

探検は国産品だけで

竹川 先生、今日の天然色のスライドは大変きれいで、をりました。皆先生がお撮りになつたのですか。

梅棹 え、さうです。きれいに出来てゐます。フジカラーですよ。立派なものですよ。外国品に絶対おとりません。私はある意味ではナショナルリストですから、今度の調査にも全部国産品だけ持って行きました。

竹川 シープはトヨタかニッサンですか。
梅棹 三菱ですよ。三菱にシップ三台借りたと言ふてやりました。ところが時々返事して

する品がすぐ手に入ります。アメリカなどでは絶対出来ないことです。出来るのは日本とドイツとイギリス位のもです。国産品だけで絶対大丈夫ですネ。

南方舞踊・民族移動

隠岐 先程のスライドで現地の女の人が檳榔樹の实と石灰と一緒にしたものを、口を朱くして噛んでゐる場面がありました。

新棹 最初口紅つけてるんかと思ひました。吐くと唾まで紅いです。
隠岐 マライ語でシリと言つてゐます。キンマの葉に檳榔子や石灰、タバコ、丁字などを包んで噛んでゐますが、歯が丈夫になると言つてゐますネ。
梅棹 口があつたかくなつて。だん／＼やめられなくなるんですネ。
隠岐 タイ、カンボジャでは何と言つてゐますか。
梅棹 さあ何と言ひましたか。

呉れないのです。まあいゝやそのうち何か言ふてくるやろ言ふて(笑聲)三菱の車のカタログを取り寄せて見てみたら、ハシゴ・シップがあつたのです。油圧式で五米程高くなるんです。こりやおもしろい車や言ふんで(笑聲)さうこうしてゐるうちにシップ三台お貸ししますいふ返事が来たものですから、シップ三台をお願ひしましたが、そのうち二台はワゴンとハシゴ・シップにして貰ひたい。ハシゴ・シップはジャングルなどの生息を調べる時便利だから言ふたところ、実はこれはうちでも余り自信がないので、特に山嶽で使はれるのでしたら保証できかねると言ふ。ちや山では使はないことにしておもしろいから持つて行かうと決めたのです。向ふでは皆びつくりしてました。丁度パンコックで太平洋学術会議が開催中だつたのですが、外国の教授達が見せて呉れ言ふので、パンコックの一番大きなホテルの前でムク／＼と五米高くなる場所を見せてやつたらびつくりしてました。パンコックのメインストリートでもシップを止めてムク／＼とやるものですからタイ人などたまげてました。

探検用の物品など日本では過去にマナスルや南極などで体験してますし、こちらの希望

隠岐 檳榔があるためでせうか。その嗜好が大体印度教や仏教などの影響が強かつたところや、仏教国に多く見られますが、さういつた印度教或は仏教の教儀或は宗教的慣習からなのでせうか。

梅棹 さあどうですかネはつきり判りません。
隠岐 それから先程の舞踊のスライドで、手の指の動きの特別な美しさを言つてをられましたね。
梅棹 え、かういふ風な恰好にして、あれは印度教の陰字を表はすのだといつてゐました。

隠岐 印度教系の舞踊として、ジャワのスリンドンババリ島の舞踊でも手の指を踊りにつれて動かしますが、足の指もやはり美しく動かしますネ。
梅棹 さうです。かういふ風にしてネ。西洋舞踊にはないものです。そして非常にテンポがゆるくて、しかし優美ですネ。
隠岐 昼間の講演会で、四川雲南方面からカ

チン族苗族とか数十以上の少数民族が山嶽生活から逐次平地にむかつて南下しつゝあるとのお話しでしたが、大変興味深いものがあります。

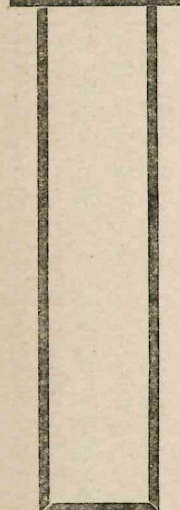
梅棹 大変面白いでせう。これも一つの民族だけ取上げた時には判らないのですが、横に並列的にならべて見ると少数民族の南下の状態がはつきりわかります。
隠岐 苗族については昔東大が調査しましたね。
梅棹 え、鳥居さんでせう。えらい人でしたネ、晩年は不遇のうちになくなりました。

隠岐 中国辺境地帯の少数民族の生息について研究しかけたこともあつたりするものから、あの少数民族の南下の状態、速度、平地の民族との交渉、それによる生活様式の変化、平地民族への溶けこむ道程などについて色々詳しいお話しを伺ひたいのですが、今日はなにぶん時間のないのが残念です。
笹本 それではこのへんで。



立花

広島市 西蟹屋町
TEL 3963
6224



した。

音楽は時化の日の海みたいな音をたて、会場いっぱい打ちよせていた。つまりなくなつた僕はヒヨコ、ヒヨコ足を進めるとプレーヤに近づいて蓋をひらいた。解説者のMは、警戒の眼を僕にくれたが、僕が何もしないことを知ると、捻じた首をすぐ元に戻した。そのとき音楽は急に上昇して拡がり、木造建の会場が音をたてて崩れるのではないかと思つた。同時に僕は素早く耳に手を走らせ、しっかりと耳をおさえた。

その僕を視て、会場の聴衆の中から笑いの渦がわきあがった。僕は、僕の自己保身のために耳を覆つたことで、会場に集つた聴衆の笑いをかい、いくらか得意であつた。

その得意な気持が、僕にプレーヤのピツクアツプを掴ませ、持ちあげさせたのだ。同時に音楽は止んだ。

解説者のMは怖い表情で僕を腕み据えておいて、

「コイツハ、バカダカラ——」

僕のことを聴衆に向つてそう解説していた。そのとき僕は急に途切れた音楽を何かに似ていると思つた。

まったく僕にはよく解らない。何時頃からこうなつたのか、多分あの時ではないかと思うんだが、その、あのときが定かでないのだ。隣ベットのシネスコが、いつか女患のY子にこんなことを話していた。

「ア奴ハ、バカジャナイ、キチガイダ。ダカラ、オオシオノトキ、気ガフレテクルノダ——」

その話を聞いていて、僕はそんなことがあるものか。僕は気狂い

じゃないと、シネスコの言葉を否定しようと思つた。だが、僕に否定できないのだ。

僕には人からそう言われても否定できない、ひとつの断点というか、断層というか、自分で無意識に行動することが、度々あるのだ。そのときの状態を僕が意識しない限り、あるいはそのときの僕を、僕が制御できない限り、バカと言われようが、気狂いと言われようが、僕にそれを否定する論理の確証はないのだ。だからシネスコが、Y子に、

「アイツハ、バカジャナイ、キチガイダ。ダカラ、オオシオノトキ、気ガフレテクルノダ——」

と、言つても僕は黙つていたのだ。

あれは確しか僕が高校三年の夏であつたと思う。あるいは秋のはじめであつたかも知れない。僕の学校とW高校とのラグビーの試合の時だつた。

バックスを守つていた僕は、玉を横に抱いて猛烈にダツシユしてくる敵のキヤプテンに、タツクルしてやろうと思つてぶツかつた。だが、ぶツかつた瞬間に僕はひっくり返つた。その後の記憶は僕にない。ただ現在でも記憶に残っているのは、あのときの激しい衝激だけだ。気がついたときには、僕は病院のうすぐらいベットの上に横たわつていた。

それが原因かどうか、僕に推断はおろせないが、そのころから僕の思考の中に断点が訪れ、頭の右半分が霧がかかつてきたような気がする。

この間も僕が廊下を腕組して歩いていると、五号室のダルマが、そうだ、こいつは全くダルマのように丸く肥つて、毛蟲みたいな肩

がつりあがり、眼玉がアメダマよりも大きいのだ。そのダルマが顔近づいてニキビをつけて、こう言うのだ。

「キチさん、あんた頭がいいでせうねえ」

キチさんと言うのは僕の姓ではない。僕が気狂であると言うニックネームだ。

僕は、僕の内部からムラムラツと湧きあがる渦潮を知覚したが、じつとそいつを内部に押しかえし、何くわぬ表情で、

「どうしてだよ」

と、聞いた。するとダルマの奴は、

「だつて何時もロダンの考える人のように、キチさんは考えているもの」

「何も考えてはなすよ」

僕は反射的にそう言つた。

「だつて、腕組をして頭を傾むけている図はどう見ても考えているポーズですよ」

僕とダルマの会話が廊下に流れると、居合せた男女患はうすい笑いを口辺にみせ、侮蔑した眼で僕を眺めた。僕はそれがカンにさわつて、

「ジャ、二宮金次郎の銅像は一年中、薪を背負つて重いだろうね。それに毎日メシも食わずに腹も空くだらうな」

僕はそのとき何うして二宮金次郎を引き合ひに出したのか、自分でも解らなかつたが、兎に角、皮肉まじりに言つた。するとダルマは平然として、気持の悪い笑いを隠そうともせず

「だからマキで儲けても、余りトクにはならないらしく、ソントクと言つていますよ」

僕は畜生と思ながら黙りこんだ。まるつきり、これじゃ落語じゃないか。

その僕の背後に、男女患の迫りうちをくれる嘲笑が湧きあがった。僕がベットにもぐり込むと、怒りがいまにも僕の頭を破るのではないかと僕は心配した。頭が気になると僕は急に立つても坐つても居れない気分にかかれ、シネスコが散歩用で作っているステッキを黙つてひきだし、力いっぱいベニヤの壁に叩きつけた。

「コンナベツピン、ミタコトナイ——」

怒りのかたまりを千切つて外部に投げつけるように、袋の中がからっぽになるまで、同じリズムで叩きつけた。

僕はベニヤの板壁を叩きながら、ずいぶん長いことそうしているように思つた。まだ僕が子供の頃から叩いているように思つた。

その板壁を叩く自分が可哀想になつて、僕の内側から涙が出そうになるのを、無理に臉の裏へおしこんだ。

僕は、僕の思考の中に周期的に訪れてくる断点を、シネスコや、他の患者たちが言うように、気狂の大潮説と同一のものかと考えてみた。しかし、この断点が必ずしも、人々が言う大潮説と一致しないことを僕は知つたのだ。

その夜は十五夜で、大きな月が野呂山の頂上に高くあがり、青い風船玉みたいにふくれあがつていた。

その夜は珍らしく詩人になって、頭の中で埃にまみれ、古びてしまったある西洋の、有名な詩人の詩をひきだし、一語、一語かむように呟いていた。

シロキツキカガ、モリニハエ

エダニコエアリ、ハズレシテ、
アア、アイシンヨ……

僕は、アア、アイシンヨの次を忘れていたのか、知っていてもアイシンと言う、この未知の女神に妙にこだわっていたのか、同じ言葉を繰り返して、病棟をとりまく松林や、かしの木の枝葉にふりそそぐ、月光の怪しいまでの輝きと、小波のようにゆれる樹の葉の中に僕の体をとけこませていたのだ。そして僕は、僕だけの世界で甘い陶酔の美酒をそそいでいたのだ。

——キチガイガ、ナニカ、ブツブツツイッテルワ——

女患部屋の廊下の前で目を眺めながら、映画俳優の某のことも、頭に粘りつけていたに違いないY子が、看護婦のS子に囁やく声で言った。

僕はそのY子の言葉で高貴な詩人の座から、いつとくに俗人の世界にひき戻された。

——チキシヨウ——僕の歯はかちかち音たて、両掌は固く握りしめられた。僕の胸は空気がはいり過ぎた風船玉よりよくふくれ、いまでも破裂するのではないかと危ぶまれた。しかし、僕はかちかち鳴る歯を無理にかみしめ、怒りの空気が一度に口辺につきださないように制御した。

そのとき僕は、キチガイと言われたことより、高貴な詩人の世界から、俗人の世界に足をひき戻されたことと怒っていたのだ。だが僕は、Y子の言葉から意外なことを知ったのだ。

それは月夜の……つまり大潮の夜に僕が気がふれてないと言うことだ。そして僕の断点の周期的おとずれが、大潮に全然関係のないことを知った。気狂が大潮に気がふれるのであれば、そして、そ

によつては手術します——

僕はカクリツ?と暫く考えた。そして、そのカクリツと言うのが、手術の成功、不成功のパーセン・テージのことであることを知った。

この話を神経質な医者と交わっていたのは、ある官立大学に籍を置いていたというOさんなのだ。そのときセンセイはOさんにいささか手を焼いている風だった。僕は可笑しかった。でも、そんなとき笑うとOさんが怒るから、僕は不自由をしたので笑いの袋をかたく閉じた。

確率が九九パーセントだつて、後の一パーセントに入る不幸もあるじゃないか。その一パーセントにはいつた人間には、カクリツは九九パーセントではなく、悪い方の百パーセントじゃないか。何を言つてやあがる。それじゃ手術なんか何時までたつて出来るものか。

Oさんは偉いからそう言ったのか?

僕の頭の右半分はまだ、重く霧がかかっていた。僕の手は無意識に頭へのびる。

それから……それから……

僕は重い右側を下にして、窓わくの方に首を捻じた。窓ガラスのサンの所で大きな銀バエが、せわしく翅をふるわせ、手足をやたらにこすりつけていた。

翌日、ベット・メイキングだと言つて、まだ僕がベットに寝ているのに、看護婦のS子や、U子や、見習看護婦のK子が、短いワラ・ポーキを持って、ベットの埃を部屋中にばらまいていた。

れが正しいとすれば、僕は気狂ではないのだ。

僕は僕が気狂でない確証に近いものを得た。そう思うとY子えの腹だちもしいにしろれて、僕の指がつくつたこぶしも、知らないうちに自由をとりもどしていた。

僕は窓の腰板の上にあけていた足をあろすと、冷たく取りすました青い目に、少しばかり唇をとがらせてみて、夜の病棟を抜けてでた。

それ以来、僕は自分が気狂でないと言ふ確信に近いものを持った。しかし、だがしかし、

僕がバカであるという人々の固定観念を、否定するだけの資料と自信が無いのだ。人の死後が誰にも解らないように——僕には自分がバカであるのか、どうか、それが解らないのだ。勿論、一般に人々は僕をバカとか気狂とか言つてはいるが……

じゃ、バカの定義は?

そんな定義がどこにあるんだ。

シネスコのように、彼の女であるT子が、他病棟の男患と散歩したと言つて、短く幅広い躰を思いきりT子の前につきだし、ハニワみたいなくびれた手で、T子の頬に平手打ちをくれるのが偉いのか。叩かれたT子は階段の踊り場でうつつぶせになり、身をよじらせて泣いていた。その声はまるで風の強い日のサイレンみたいに、高くなつたり低くなつたりして。

叩いたシネスコは横に拡がった肩をますます横に拡げ、くびれた両手を腰にあてて、夜店のドロエビスみたいな顔の、細い眼をつりあげて、T子を睨みつけていた。

——センセイ、手術のカクリツはどれくらいですか?そのカクリツ

「ベット・メイキングとは、ベット上の埃を空中に舞いあがらせ、またもとの位置に定着せしめる、非エーセイ作業のことを言う」僕と同じように朝寝坊のOさんが、ベット・メイキングで叩き起された腹いせで、U子にそんな皮肉を言っていた。

そのとき、僕はベットの中で考えていたのだ。人間の思考過程における思考容量というものがあつて、それをオクターブの単位で計ると、普通、何オクターブ位で、僕はどれ位で……

思考のキーはイロハ四八文字で四八音階、ドレミファに分けて六オクターブ。その中で一等使用する鍵はどの辺りか。僕はそんなことを真剣に考えていたのだ。

「何をブツブツ言つてるのよキチさん」

S子が突然、僕の思考の論理をぶち破った。そのS子が僕はいくらか癪にさわつたが、重大なときであつたので、いつものように怒りの虫を内側につきもどして

「S子さん、人間の考える機能には幾つぐらいキーがあるのだろうか」と聞いたのだ。するとS子は

「そんなこと解るもんですか。あんたそんなこと考えてるから頭が変になつたのよ」

考えるから頭が変になつたのか、変になつたから考えるのか、僕は若干そのことにこだわつたか、

「例えばサー、イロハ四八文字のように、思考のキーがあつて、そのキーが普通人間には何オクターブ位あるというようにな……」

僕がそう言うと、シネスコも、Oさんも、U子も、K子も、みんな

な軽蔑のいろを眼に見せて、いつものように笑っていた。

僕はその侮蔑の笑いを受けると、自分のしゃべったことが、何か取捨のつかないことをしたようで、ベットから躰をおこした。その僕の眼に、シネスコが手をクルクルと廻して頭の横で止め、ジャンケンのときのように掌を開いたのが見えた。

シネスコを視ていた見習のK子は、メイキング用のホーキを喰べたみたいで、紅唇のところに持ってゆき、笑いが飛びださないようにホーキで唇をおさえていた。

「四八文字キーがあれば、キチさんののは、コ、がこわれているのよ。解った？」

僕の尋ねないことが、S子の紅唇からトゲになって、僕の耳をつきさすと、部屋の中はわれるような哄笑で渦まいた。

僕は毛布をかぶってベットにまた横になつた。僕の躰はケイレンし、息ぐるしいほど怒りでふるえた。その僕の耳に、Oさんのラヂオが、激しい怒とうのざわめきを聞かせた。チャイコフスキーか、ストラビンスキーか僕に馴染のない人間の音楽だった。

そいつは遠慮もなく僕の耳の中に侵入してくる。

そして、あの……

——コイツハ、バカダカラ——

その潮騒に似た音楽が僕の耳をジュウリンすると、僕の躰は毛布の中でしだいにしなえていった。その僕のベットの周囲を、嵐のような波頭と、笑いが二重になって流動した。

僕は自分はバカなんだ。だから僕は我慢しなければならぬ義務があるんだ。いくら悲愴な気持ちになつて、自分に言い聞かせた。

そのとき、ふいにS子の言葉が矢のような早さで、僕の耳をプチ



頭が軽くなるのと反対に僕の下半身は必要以上に重くなった。こう下半身の重いのはパンツのせいだと僕は思った。

僕が河原にパンツを脱ぎすけると、涼しい風が僕の股間を渡っていった。S子の眼とトンボの眼が、僕の眼前を飛び交う。僕はそいつを追ひ払うように手を振って病棟への道を歩いた。あるいは、それは火葬場への道であつたかも知れない。

僕が行く道の周囲には、直ぐ様々の人形が飾られた。やたらに口をパクパク開く人形を、僕は金魚鉢がいらぬから便利だと思つた。人形は怒つた顔で視たり、女の人形は好奇と笑いを秘めた眼で僕の股間をすばやく盗視した。小さな人形は僕を視て泣いたり、小石を拾って投げたりした。

僕が歩くと周囲の人形も、僕に平行して歩いた。こいつらは僕の影だと思つた。いや、この人形は僕の家臣だ。でなければ僕についてくる理由がない。

ブルー、グリーン、ブラック、ブロンズ、天然色フィルムがゆつくり僕の眼前を回転する。ホワイト・ドレスのクローズアップ。同時にルーシユの濃い唇が画面いっぱいに拡がった。僕は急にそいつに悪戯がしたくなつた。僕は映画の主役になつた。真紅なルーシユが僕の視界から消えないうちに……と僕はあわてて人形の肩をつかんで手許に引きよせた。僕は僕の唇を人形の唇に重ねたいと思うと、人形の眼前に僕の唇をつきだした。白衣の人形は僕に解らぬ言葉で絶叫して躰を崩した。

その人形の声が終わるか、終らないうちに、人相のよくない人形が棒切れや、竹ぎれを持って僕に近づいた。

——今度は映画は活劇になるんだな——

抜いた。

「キチさんは病院を間違えたようね。あんななんか結核療養所でなくて、白島の病院にゆけばよかつたのに……」

白島の病院というのは、アタマの病気の人間が入る病院である。僕はベットにいるのが耐えきれなくなつて、毛布を蹴あげて、河原への道を急いだ。

僕は怒りをふみしめるように、道をふみつけ、ふみつけ歩をはこんだ。太陽は斜め上からまぶしい矢を、僕のアタマや、眼球にプチこんだ。その光を眼玉に受けると、僕の足はクラクラと崩折れそらになった。

僕が河原に出ると火葬場の上で、鳶が大きな輪を空間にえがいていた。僕は鳶に手がとどかないものかと考えた。

僕はすぐパンツ一枚になると流れの中に入つていった。そのとき河底を鳶がとんだ。すかさず僕は、鳶の上に躰をおつかぶせた。鳶はシブキになつて消えた。僕は河底に不態に四つ這になつた。四つ這になつた僕が消えた鳶をもとめて立あがるうとする、眼前のこわれた光の反射が、僕の眼玉をプチ抜いた。

僕はその光に足をとられ、再び流れの中に四つ這になつた。同時に僕の頭の霧が消えて、比重の大きい金属がいつぱい詰つた。僕は眩暈を感じた。やたらに抵抗感のキハクな水を掴んだり、押ししたりしたが、僕の手には何もふれてこなかった。

僕の頭は水の中でしだいに重量を増し、肩の上で段々ふくれあがつてきた。その頭が許容量以上にふくれあがつた時、僕は頭の中でボゴツという奇妙な音を聞いた。同時に頭の中に水が浸入すると逆に軽くなった。僕は頭をもたげてたちあがつた。

僕はそれらの人形を眺めた。人形は僕に解らぬ言葉でしきりにガナリ立てていたが、黙っている僕にいきなり襲いかかると、僕の腕を捻じあげた。僕はふいをつかれて、いくらか面喰つたが、——僕が今度は悪役になるんだな——そう直感した。

人形は僕の逆手を取るとゆつくり歩きはじめた。逆手をとりれた僕は、必然的に人形の花道をゆく晴姿に、ハクをつけてやることになつた。その僕の脇したや股間を、相かわらず涼しい風が吹きぬけた。

赤レンガの舞台にいくと、人形はあの不解な言葉を、パチンコ玉を弾く速度で言つて、僕の躰をレンガ壁の部屋に押しこみ、何処えともなく消えていった。

それにしても、観客はみんな帰っていないのに、あの異国の言葉を話す人形は、まだ僕をこの赤レンガの部屋から出してくれない。

——モシカスト、アイツハ、マホーツカイジヤナイカ——と、僕は思つた。

そのとき、遠い所からあの潮騒に似た音楽が流れてきた。

——コイツハ、バカダカラ——

(終)

あとがき

◎日本浪漫派——この昭和十年代のはじめに旺盛と興ったロマンティックの文芸運動については、イシムムの文芸運動については、現在二〇代の若い人々は、あまり知ってゐないかもしれない。だが三〇代、四〇代、五〇代の人々はそれ〴〵の世代なりに、影響を濃くうけ、又は何らかの感慨を懐いてゐる筈である。

◎日本浪漫派に対する戦後の批評は、大畧三つに分けられる様だ。敗戦直後の真相暴露的なもの、口汚ない罵詈雑言に類したもの、口ぞいて、①戦後文学者の日本浪漫派との対決と、超克の曖昧さを指摘した竹内好の論が、一応真正面から問題化したものであつたらう。中野重治「オニ文学界と日本浪漫派など」は竹内の論に回答を与へたものである。竹内はこの問題を彼の国民文学論のなかで展開したが、それについて、②昭和文学史のなかで、日本浪漫派の意義と位置を定着させるための研究と評価である。近代文学同人共同執筆「昭和文学史」、特輯昭和文学史（国文学の解釈と鑑賞33年1月号）、昭和の文学（文学33年4月号）などである。他に単行本のなかで触れてゐるものもあるが、これらは概観して、国文学者の真摯にとりくんだ研究は少く、多くは文芸評論家の概念的な論評である様だ。③ところが昨年から橋川文三が「日本浪漫派批判序説」を黒の会発行同時代（4、5、6、7号、未完）に掲載しはじめた。これは自らの経験を通じて、自らの精神形成史のなかで意義を模索しようとするものであり、態度は真面目で真剣である。前述「文学」の「日本浪漫派を中心として」を傍題とする特輯は②と③の二つの刺戟と上で集約的にあらはれたものと言ひ得る。かういつた個人的に主要テーマとして真向から真剣に取上げる傾向が、若い新しい人々の間に盛んになつてきた。橋川氏について、江藤淳「神話の克服——反ロマン主義的考察（文学界33年6月号）、塚本康彦「保田与重郎」（古典と現代三）つゞいて詩人の大岡信が「詩人と青春——保田与重郎ノート」をユリイカ8月号から載せはじめた。彼等に共通してゐるのは、日本浪漫派——保田與重郎

の観点にたち、常に日本浪漫派否定の側にあることである。

◎さうした小さな小誌が日本浪漫派を特輯し、回顧・展望したのはその文芸運動を昭和文学史のなかで虚心に省察し、現代の危機の日になほ、永遠にほろびない花麗な青春の詩心を恢弘したいが故である。

◎座談会は紙数の都合もあり編輯室の努力も足りず意に満たない点が多いけれども、伊藤佐喜雄氏外五人の方々の回顧の文章と共に、当時の雰囲気を感じてゐた。

◎アンケートは、作家、評論家、詩人、歌人、学者のなかで、日本浪漫派とその周辺にゐられた方々、及び批判的立場にある人々に忌憚のない御意見を伺つた。

◎御寄稿及御回答いただいた方々に誌上からお礼申しあげます。

◎今回の特輯について、広島大学清水文雄教授からたまはつた御指導と御援助に感謝いたします。

◎東南アジアから帰国されたばかりの大阪市大梅樟忠夫助教授との座談会も御執意いただきました。

◎次輯原稿締切は八月末とします。

季刊 **バルカノン** (8) ・昭和33年7月25日印刷 ・発行人 笹本 毅 ・発行所 **火の会**
 頒価 50円(〒8円) ・昭和33年8月1日発行 ・編輯人 隠岐国彦 ・現市宮原通7の126(従本方)

新しい海水浴場・海上スポーツの基地と子供遊園地

海 楽 園

7月5日より開園・ペランダ・プール・野外ダンス場完備

宮島口海岸・電鉄バス競ヶ浜下車・電車宮島口下車

瀬戸内海モーターボートクラブ

会 員 募 集 中

モーターボート・ヨット・水上スキーのセンター

★お問合せは広島市紙屋町41 (TEL ③3408) 全クラブへ